

大學教學

創刊号

創刊の辞……………	(2)
救世の神業と救いの信仰……………	桜井八洲雄(4)
神について……………	土井 靖都(15)
大本教典の範囲……………	木庭 次守(34)
大本史観について……………	喜多 哲良(48)
みろくの世に就いて……………	鈴木 祥雄(61)
世界・日本・大本……………	成瀬 邦男(67)
恵みの賜もの……「和解」誌より……………	土居 真俊(77)
教学院通報・後記……………	(79)

大本教学院編

創刊の辞

大本の天職は「教」即ち天授の真理を宣布し、地上に天国を建設するところにあります。本来、大本の教は宗教以上の宗教、哲学以上の哲学、倫理以上の倫理であって、最も高遠玄妙な真理であります。それ故、志ある人々が総がかりでとり組んでも、そう簡単に闡明されるような性質のものではないのであります。

大本教学院は教義の研鑽と教義の体系化、社会事象の調査、史実の編纂等を主な仕事としていますが、さて本格的にとりかかろうとしますと、その責任の重大さを思うと同時に、自らの微力と体勢の弱体を痛感せずにはおられません。しかし、現在は現在としての最善をつくしてゆくより外に道はないと信じますので、一步步その実現にむかつて進んでゆきたいと念願しております。

三代教主出口直日夫人は教主として立たれた時に次のような短歌によって信徒の進むべき道を示されました。

この道を継ぐべく生れ来し吾に神の守りのなかるべしやは

吾がいのち天^{かな}知り給ふ残されし道一筋にふみゆかむのみ

天にます母にまみえん日のためにうつし世のわざはげみてなさん

示されし道はひろらに明らけしなに今更に迷ふ人らぞ

過去六十余年の間に、説かるべきこと、教えらるべきことは、ことごとく示されているのでありますが、さて実際にその教の受けとり方になると、千差万別であります。個人的な信仰としては、それぞれ主観的になるのはやむを得ないとしても、重要な点においてバラバラになっているならば、神業遂行の上に大きな支障を来すことになります。少くとも教主の御意志は一本に、しかも屈折することなく全信徒の末端にまで流されなければなりません。

以上の趣旨にもとづき、こんど「大本教学」を年三四回発刊し、重要な問題についてハッキリした指示をし、また一面新たな研究と宣教の資料等を発表してゆきたいと存じます。

つきましては「教」の重要性に鑑み、皆さんの心からなる御協力を切望いたします。これをもって創刊の辞といたします。

昭和三十五年一月五日

大本教学院

救世の神業と救いの信仰

桜井 八洲雄

一、世界の 大元

由来宗教には、「世界の終末」とか「救世主」という思想がある。仏教では末法の世に弥勒菩薩が下生して地上に楽土を建設するといひ、キリスト教では世の終りにキリストが再臨して地上に天国を建設するといわれている。神道にも、「天の岩戸がくれ」と「天孫降臨」の思想があるのと似ている。

もっとも、今日では「救世主」という観念も変つて、超人的な人があらわれて世界を救うというようなことは信じられなくなって、すべての人が力を合して、よい世界をつくることに専念すべきである、という考えもある

また一神即多神の宗教にあつては、救世主は必ずしも一人でなく、大救世主を中心として中救世主、小救世主が出現することも考えられるという思想もある。またこれまでの宗教で説くような救世主（歴史的救世主）でなくとも、誰でもよい、現代を救うような人であればよい、というような考えもある。とにかく救世主の観念はいろいろに変化して来ていることは争えない。また中には、「われ汝を罰す、汝を許し、汝を救う」というような人類をドレイ扱いにする特権思想を排し、「救い」とか「救われる」とかいう言葉を忌みきらう人さへいる。「解放者」というような言葉の方が現代人の感覚にはピッタリくるのかも知れない。大本では「救世主」の代りに「

更生主”の言葉を用いている場合がある。

しかし、宗教の目的は人群万類の救済であることにま
ちがいはない。

「綾部の大本は、世界の大元となる大望な処であるから、此大本に在りた事は皆世界に在るから、此中に仕てをる事が世界の形に成るのであるから、大本に混りの無きやうに速ふ成りたら、世界の埒が早く着くなり。また大本の立替が遅く成ると世界の立替が遅れるから、世界の守護神の身魂が永らく苦しむのであるから、それを見るのが神は可哀想なから、此中の立替を早く致して、助ける道をこしらへておかねば成らんから、神が急き込むのであるぞよ。此大本の中から改心を致して、世界の人民の助かるやうの事を致さんと、誠の道にはならんぞよ口先ばかりの誠は嘘であるから、実地正末の行為を致して皆和合して御用に掛らんと、世界の事が永びくぞよ。疑があると、何程結構なことを申して知らしても行為で見せても、誠の事が嘘の様に見えるから、心の洗濯を致して、元の水晶の靈魂に研き上げて、日本魂に立復りた

ら、何も明白に透きとuring様に判り出すぞよ」

(大正五年旧十一月二十一日)

この神諭は現段階の教団として深く考えさせられることの多い神諭である。大本の神業は救世の神業であり、その経緯は救世の経緯であり、その信仰は救いの信仰でなければならぬ。

大本は世界の枢軸であり、大本の中に起ることが、そのまま日本や世界に現れてくるということは、大本の歴史がこれを実証しているところである。例えば、昭和十年(一九三五年)十二月八日に第二次大本事件が惹起した。これは六年後の昭和十六年(一九四一年)十二月八日、太平洋戦争となって現れた。昭和二十年(一九四五年)九月八日、大本事件は大審院において原審通りの判決を言い渡されて解決した。それから六年後の昭和二十六年(一九五一年)九月八日に、サンフランシスコ会議に於て日本は独立した。大本の事件はそのまま日本の姿となって現れているのである。

こういうことは、大本信徒の信ずるところであるが、

ここで大本とは、綾部、亀岡の本部ばかりのことではなく、地方の本苑、主会、分苑、支部、信者の家庭等全部を網羅した教団全体のことである。

その大本に果して「混りの無きやうに」なっているかどうかを反省して見なければならぬ。「大本の立替」ができていないようなら、早くこれを断行して、「助ける道をこしらへておかねばならぬ」わけである。そして「世界の人民の助かるやうの事」に着手しないと誠の道とはいえない。それには、全信徒が「和合」一致して神業奉仕の実をあげなければならない。

二、開祖と聖師との関係

さて「大本の立替」は過去において大正十年（一九二一年）と昭和十年（一九三五年）の第一次および第二次大本事件によって行われ、昭和二十一年（一九四六年）終戦後「愛善苑」として新発足したのである。しかし、現在の大本が「混りの無きやうに」なっているとはいえない。改善すべき点は多々ある筈である。ただ過去にお

ける「大本の立替」は、二回とも政府の弾圧によって行われた。今度は大本自身の自覚によって行わるべきであろう。

「助ける道」が大本にはないかという点、ハッキリ示されている。

世の中に立つ方法を教ふるは

神のよさしの救主なりけり

という歌が示されているように、愛善信真の大道は示されているのである。

三代教主出口直日先生が昭和二十七年（一九五二年）三月三十一日、道統を継承された時のお歌は、

わが命天知りたまふ示されし

道ひとすじにふみゆかむのみ

示されし道はひろらに明らけし

何今さらに迷ふ人らぞ

というのであった。開祖、聖師、二代教主によって教えられることは教えられ、説かれることはことごとく説かれているので、あとはこれを実践するだけであるといっ

て立たれたのが三代教主である。

大本には「救世」の思想がある。しかしそれは今日まで地上に出現した救世主または預言者とは異なるところがある。それはこれまでの救世主や預言者は何れも自然界を主とし、靈界を従として、地上の人間に天界の教の一部を伝達していたのである。然るに物理的科學の極度に發達した現代においては、もはや従来の教理をもつては到底安心立命を与えることができなくなったのである。

今日は宇宙時代といわれるが、従来の宇宙は未製品時代で、まだ目鼻がついていなかったのである。しかし、天運循環して、ここに宇宙の大整理を施して、地上に理想世界を建設すべき時期に到達したのである。これが大本でいう「立替立直し」であり、「みろくの世建設」である。今度の大整理は、人智人力のよくするところのものでなく、神人兩界の大成を期せらるることになり、明治二十五年（一八九二年）をもって開祖出口なお子刀自の肉官を通して國常立尊の神勅となって現れた。しかし、大正七年（一九一八年）秋、開祖の昇天後、残る後半の

神業は豊雲野尊の肉宮たる出口聖師に譲られた。この開祖と聖師との關係は、ちょうどキリスト教におけるヨハネとキリストの關係に相応するもので、開祖は明治二十五年よりみろくの世出現の予言、警告を發し、神示を傳達して救世主の再生、再臨を待っておられたが、七年後明治三十一年（一八九八年）出口聖師は開祖を訪れ、ここに開祖と聖師の結合となつて大本の基礎は確立したのである。

ここで開祖は体的經綸者であり、聖師は靈的經綸者であることを注意しなければならない。開祖は水をもつて洗礼を施し、聖師は火（靈）をもつて洗礼を施されるのである。火の洗礼とは靈主体的の神業であつて、靈界を主とし、現界を従としたる教理であり、水の洗礼は体主靈従といつて、現界人の行為を主とし、死後の靈界を従となして説いた教である。宇宙は靈界が主に、現界は従としてつくられているので、靈主体従に考えられるべきであるが、靈に偏し、体に偏するも正鵠を得たものでなく、靈体一致が真理である。

「靈界物語」第一卷「発端」には、こう示されている
 「すべて宇宙は靈が本で、体が末となっている。身の方面、物質的現界の改造を断行されるのは国祖大國常立神であり、精神界、神靈界の改造を断行したもうのは、豊国主神の神権である。ゆえに宇宙一さいは靈界が主であり、現界が従であるから、これを称して靈主体従というのである。」（筆者註——ここに「豊雲野尊」でなく「豊国主神」と記してあるのに注意すべきである。）

ここに「火の洗礼と水の洗礼」について聖師の教示を左に掲げておく。

「火をもって、バプテスマを行うという事は、人間を靈的に救済するという事である。これ大乘の教であって今迄の誤れる総てのものを焼き尽し、真の教を布かれる事である。水をもってバプテスマを行うという事は、人間を体的に救済する事である。

火は靈であり、水は体である。

瑞靈の教は永遠の生命の爲め欠くべからざるの教であって、厳靈の教は人生に欠くべからざるの教である。

厳靈の教は、道義的であり、体的であり、現在のである。

瑞靈の教は道義を超越して、愛のために愛し、真の爲めに真をなす絶対境である。所謂三宝に帰依し奉る心である。火の洗礼と、水の洗礼とは、それ程の差異があるのである。某地の大火災を目して、火の洗礼だと人はいうけれど、それは違う。水の洗礼である。如何となればそれは体的のものであるから。」

要するに大本は開祖と聖師を二大教祖と仰ぐので、大本教法第三章（教祖）には、次のように示されているのである。

「大本は、開祖出口なお、聖師出口王仁三郎を二大教祖と仰ぐ。開祖は厳靈の神格に充たされて神諭を傳達し救世の基を開き、顕幽両界を守りたまひ、聖師は瑞靈の神格に充たされて愛善信真の大道を啓示し、万民の罪を贖わたたまひ、救世主神として顕幽両界を救いたまうことを信奉する。」

開祖が聖師に対面されるまで、昭和二十五年から七ヶ

年、口に筆に救世主の出現を待っておられたが、それは次のような言葉となつて現れている。

「このこと。わけ。身魂は、東から出てくるてよ。この御方がおいでなりたら、さっぱり日の出守護になるから世界中に神徳がひかりかがやく神世になるぞよ。なかなか大事業であれども、昔からの生神の仕組であるから、別条はないぞよ。」（明治二十五年旧正月）

「出口直に明治二十五年に申してあること、この大望な経綸（しぐみ）のいたしてあることを、世界に一人知りておること、いいきかしてあるうがな。このことが判りてくるぞよ。誠の人はこしらえてあるから、この誠の人が出てこんと解らんぞよ。この人が出てきたなれば、すぐに解るぞよ。」

「上田どの（出口聖師）、ようたいもうな御用をしてくださいた。そなたが綾部へまいりたのは、神の仕組がいたしてあること、なにごとが出来るのも、みな天であらためがいたしてあることであるぞよ。九曜の紋を二つ増加したのは、つごうのあることであるぞよ。いまはい

われぬ。このこと成就いたしたら、おれいに結構をいたすぞよ。

良の金神の初発の世話をいたしてくださいるのは、誠の人が出てこねば納らぬと申してあるが、この二人が神のまことの世話をいたしてくださいるかたぞよ。良の金神の道の世話をいたした人民には、なんなりと一つの機能をさしてみせるぞよ。万劫末代のことをいたさすぞよ。時節がまいりて煎豆にも花が咲きて、金光どので表へ出かけたなれど、ちよつとところで成就せず、表になりておらんから、因縁ある出口直に苦勞をさして出してもらわな、このことは成就いたさんぞよ。それについて上田どの、深い因縁ありて、たいもうな御用をいたさして世を救わすぞよ。」

開祖が二十七年間にわたって書き綴られた「筆先」は誰にもわかりやすい言葉であるが、さてその真の解釈となると、そう簡単ではない。それで神諭にはこう示されているのである。

「出口に實際（じつじょう）を書かすから、それを上田海潮が写して

細かう説いて聞かす御役なり」

(明治三十三年閏八月一日)

「出口は将来の事知らず役、海潮(出口聖師)はそれを説いて聴かせて、世界を改心させる役じやぞよ」

(明治三十三年閏八月十一日)

大本の筆先の真解者は出口聖師であるということが明かに示されているので、その解釈が浅薄であつたり、また曲げられたりすると、とんでもないことになるのである。大正十年秋より聖師によって口述された「靈界物語」こそ大本神論の真解書である。靈界物語口述の目的は、開祖の筆先の真精神を詳説して愛善信真の大道を明示し人群万類を安心立命せしめんがためである。

出口聖師を救世主であるということをいわれたのは、開祖自身である。また筆先の真解者は聖師であるといわれたのも、開祖自身である。

三、二大教祖と教主との関係

次に大事なことは、二大教祖と現教主との関係である

第三章に「開祖は嚴靈の神格に充たされて神諭を傳達し救世の基を開き、顯幽兩界を守りたまひ」とあるので開祖は大正七年の秋に昇天されたが、その神靈は顯幽兩界を守護したもうということである。同じように、聖師が「救世主神としては顯幽兩界を救いたもう」とあるので、五尺有余の肉体の聖師ではなくして瑞の靈の神靈を指されていることはいうまでもない。

聖師が昇天されたならば、肉体をもたれた時よりもさらに神力を発揮されているということは、次のお歌によって明かである。

一日も早く天人界に入り

瑞の靈の力示顯たし

聖師は昇天されたので、現界の救いに対しては御手下しようがないが、その神靈は何時、何処で、誰の肉体を使われるかは、到底予測をゆるせないと思う。かのマッカーサー元師のごときも、終戦後の日本の掃除役として大きく使われていたのではないか、と信じられる節がある。彼は一応の使命を終ったので、「老兵は消ゆ」と

いって帰国したのであろう。出口聖師はかつて「自分は大本の王仁三郎でも日本の王仁三郎でもなく、世界の王仁三郎である」といわれたくらいで、大本教団だけを使つて救世の神業を遂行されているような小さなものではない。

「世界国々、ところどころに、世の立替えを、知らず神柱はたくさん現われるぞよ。みな、艮の金神、国常立尊の、仕組で、世界へ知らしてあるぞよ。

この神は、ひとり、手がらをして、喜ぶような神でないぞよ。仕組のわかる、守護神でありたら、たがいに、手をひきおうて、世の元の、御用をいたさすから、これまで心を、いれかえて、御用をつとめて下されよ。三千世界の、神々さま、守護神殿に氣をつけるぞよ。谷々の、小川の水も、大川へ、末で一つになる仕組。ここは世の元、まことの神の住いどころ」

この神論によつても明かなように、少数の人間の力でこの世界が救われるものではない。「瑞の霊」とは、天之御中主大神、高皇産靈大神、神皇産靈大神―三神即一

体の活動をなしたもう。これを瑞の霊、三ツの身魂というのである。要するに、靈力体の三大元に関連して守護したもうゆえに三の身魂みたまとなえたてまつるのである。

しかし、救世の経綸の中心地はもちろん、綾部、亀岡の両聖地であることは神示の通りである。そして、救世の神業の継承者、道統の継承者も神定されているのである。これについて、大本教法第四章（教主）には、

「大本は、神定により教主が二大教祖の道統を継承し神意を受けて救いの神業を遂行されるものであることを信奉する。」と示されている。

人間は人間として中心をもつべきであつて、人間一人一人が主神を仰げばそれによいという思想は誤りで、人間が人間社会にその中心を発見した時に平和は招来する宇宙の中心はもちろん主神である。人類の中心が発見されない間は「和」がある筈がない。教団としての中心は、教主である。もし教団に「和」がないならば、教主に帰一していないからであらう。

教法に示されているように、教主は「神意を受けて救

いの神業を遂行されるものである」限り、教主の御意志

が太く一本に教団の信徒の末端にまで流されなければならぬ。教主の御意志が二本にも三本にも流されたり、屈折して流されるならば、それは分裂症であって、一大神人の姿になっていない。もし教主の御意志が何らかの事情により、また何らかの圧力によって十分に発現されないならば、それは教団として「和」も「力」もある筈はない。

そして教主と教主補とは一体である。教主は祭と教であり、教主補は政である。

大本神諭には、

「婦女の肉体は末代神の御用を致さすなり、男子の肉体は末代変性女子の身魂を選びぬいて世を治めさすなり此経論は何時になりにても変える事は出来ないのであるぞよ」
(明治四十三年旧四月十八日)

と示されている。

ここで、教主補と教主補佐の区別を「曉の鳥」より左に再録しておく。

輔と補と、補佐との区別

一、輔。

神様の御用として綾部の大本に於ける聖師様の御役は二代教主補であります。此輔の御役は唯聖師のみに限るのであります。

一、補。

代々の大本教主(三代教主以後)の御婿さんの御役であります。

一、補佐。

教主を補佐して神務と人事とに当る御役であって、左の二つの例があります。

一は補になるお方がそれ迄補佐としての職務を執らるゝ場合、

一は補にはなれないが補佐として執務する場合、

四、救いの信仰

大本の信仰の救いはどういうものか、大体次のように要約される。

一、もし開祖が救世の基を開かれず、聖師が救世主として降臨され、万民の罪を贖い、救世の経綸と活動をされなかったならば、人類は救われなかったであろうということ。

二、宇宙の祖神天之御中主大神は嚴の御魂の大神と顯現したものであるが、嚴の御魂に属する一切の物はことごとく皆瑞の御魂に属せしめたものであるから嚴の御魂、瑞の御魂は同体神ということであり、神を三分して考えることはできない、つまり心に三を念じて口に一ということはないということ。

三、瑞の御魂を救世神、または救神と称え、または主の神と単称するのであるが、主の神は宇宙万有を濟度すべく、その御魂を分け、あるいは釈迦、キリスト、マホメットと化り、その他種々雑多に神身を変じたまいて天地神人の救済につくさせたもうた仁慈無限の大神であること。

四、主神、救世主、出口聖師の三一性（この三つは一つであること）を信ずること。

五、出口聖師を救世主と信ずることは、五尺有余の肉体ではなくして、瑞の御魂を信ずること。

六、出口聖師は御昇天後も、その神靈は顯幽兩界を救うために不断の活動をつづけておられること。

七、出口聖師の教は愛善信眞の大道であって、救いの道は開祖の大本神諭を眞解された「靈界物語」に示されているということ。

八、大本の教主は神定の繼承者で、代々の教主によって救世の神業は次第に完成されてゆくということ。

九、教主と教主補は一体であり、その時代々々によって説示されることは、大本二大教祖の示された教と合致しているということ。

十、大本の救世の神業は、綾部、亀岡の両聖地を中心として進められてゆくということ。

十一、大本基本宣伝歌の「誠の力は世を救う」の「誠」は全キコト即ち神の意であり、眞言（^{マコト}聖言）の意であって、神の力、聖言の力によって世界は救われるものであるということ。

十二、救いの道（方法）が示されてある以上人類が口と心と行の三つそろった誠をもって実践するならば必ず救われるものであるということ。

十三、大本は世界の大元であり、大本教団が先ず救世教団としてこの中に教の実践を示し、世界救済の経緯と神業が進められるべきこと。

救いの信仰は大本の信仰であって、普通の神仏の信心

とは根本的に異なるのである。先づ大本から善の鏡を世界へ示さねばならない。大本神諭（明治三十二年旧九月十九日）には明かに次のように示されているのである。

「世界へ善と惡との鏡をだす大本であるぞよ。いままでは日本だけのことでありたが、これからは三せん世界の鏡になる大本であるぞよ」

世界の救済如何は全大本信徒の双肩にかかっていると
いうことを自覚すべきである。
(おわり)

神について

土井靖都

一、宗教の基本は神

宗教は神により、神の道を説き、人を救い、世を濟うものであつて、基本は神である。したがつてその信奉せる神のいかんによつて、その宗教に正邪、高低、不完全完全が生ずる次第である。邪より正、低より高、不完全より完全がよいことは申すまでもないことであるが、世人の多くは正邪、高低などには顧慮を払わず、病氣がなおる、商売が繁昌するなどといえば、その方になだれていくという具合で、いわゆるおかげ信心、身懃信仰で、迷信に陥り、邪道に走るものが、はなはだ少なくない次

第である。

信仰するならば、より高く、より完全なものにつかなければならない。いま、宗教の基本、信仰の対象によつて宗教を分けるならば、大体、世界の古き宗教は一神教と多神教とにわかれる。何れも一方に偏より、完全とはいえない。

一神教は、キリスト教、マホメット教がこれに属する。

仏教は多神教である。日本の古典には造化の根本神として天之御中主神の御名が挙げられているが、延喜式神名帳にも、その神社を伝えていない。宮中の八神殿始め正式にこの神が奉斎されているところはないといわれている。

る。——天の橋立の籠神社には祀られている——たゞ無格社、郷社等に若干祀られているところがある。また、北辰崇拜と合し、妙見信仰を生み、したがって妙見社は同神を祀っているとせられている。しかし大体よりいえば、神社神道も多神教的であるといえよう。

二、一神教と多神教はこれを合わせなければならぬ

イ 事実上両者は合わせなければならぬ。

宗教は、本来最も強く人の魂を把握し、支配するものであるから、そこには非常に熱がある。自己の宗教を護るためには、命をかけても惜しまないほどのものである。宗教は、皆愛を説いているにかかわらず、宗教ほどあい

反目し、排撃し、斗争し、戦争すらするものはない。仏教についてみれば、奈良の法相宗の本山興福寺と華嚴宗の本山東大寺の僧徒は、しばしば大斗争を行い、同じ天台宗の比叡山延暦寺と、山麓の園城寺三井寺との間にもはげしい斗争が行われ、三井寺は七回も焼打ちをされ、時には堂塔僧房等七百余、舎宅一千五百宇ほどを焼かれ

たこともある。本来、汎神教で、静寂で、奥ゆかしい仏教においてすら、かかる反撥、斗争がある。キリスト教においては、十一世紀から十三世紀にわたって大きな十字軍だけでも七回も起され、中には少年十字軍まで起されている。キリスト教において旧教と新教の間には、新教の歴史的成立の上よりみるもそこに相反撥するものがあるのは当然といえよう。マホメットは、自から剣をとって陣頭に立ち、アラビヤの諸部落を統合したが、コランにも「アラアの道に戦え」（第二章第二四五節）と記され、改宗を求めて、従わなければ剣によって解決する外はないとされた。

由来、一神教より多神教をみれば、偶像礼拝の迷信邪教だといひ、多神教より一神教に対しては、その造物主なる超絶神の存在を認めないで、ホイエルバッハの所見の如く人間の願望を象徴化し、理想化して神をつくったので、神が人間をつくったのではない、人間が神をつくったのだと見ている次第で、けっきょく、互に迷信視している。かかる実際より見れば、人類が根本的に、精

神的に融和統一されるには、まず人の精神を支配する宗教が、基本的のところにおいて統一されなければならない。本来、すべて円満具足ということとは、人類の窮極的理想であり、理念当然の要求である。

○ 真実義上両者は合わせなければならない。

天地万有の生成化育の大本源たる主宰者は、天主であらせられるが、無数の神神（天使）がましまして、各各御分担があつて、万有の持護化育が行われているのである。地球には地球の司宰神があり、国国所所には、国魂の神、塵土の神等が任けられており、雨の神、風の神等もあり、その他、一事、一物といえども分担の守護神のないものはない。一神教たるキリスト教においても、世の終りのときのこととして、「われ四人の地の四隅に立つを見たり、彼等は地の四方の風を引止めて地にも海にも諸種の樹にも風を吹かせざりき……」といつてある次第であるが、神神の御守護のおかげで天に日月がかかりて運化に差なく、この複雑微妙にして美しき大地の営みもあり、人類の生活もあり得るのである。であるから当

然にこれらの神神に対して敬愛の誠を捧ぐべきである。

本質的にいつて、一神教の大なる欠点はここにある。

しかし、必ずしも一神教において、多神教を迷信として排斥することを不都合とも言えないはずのものがある。

それは、靈界においては悪魔や邪霊が一ぱい跳梁している。悪魔や邪霊でも力のあるものは病氣なおしをしてくれ商売を繁昌さしてくれる。多神教的信仰境域にいる多くの人人は、正邪の区別もわからないはずでもあるが、邪霊とわかつて、病氣がなれる利得があるということになれば、邪霊にぬかずき、一生懸命に信仰をささげるものも少なくはあるまい。こういうことになれば、かかる人人は邪霊の虜となり、邪道に陥ちるべきである。であるから、靈界に悪魔、邪霊が跳梁している限りは、概して一神教の必要があるべきである。しかし、今や三千世界の立替立直の時機が到来している。現界は、靈界と裏表をなし、密接不離の關係に立っている。一般人は意識はしていないが、人間はたえず、靈界の影響作用をうけているのであつて、現界の立替立直は、先ず

靈界の立替立直が先決なのである。靈界の立替すなわち大掃除がおこなわれつつあるのであって、靈界が浄められてしまえば、危険性はなくなるから、敬愛、礼拝すべき神神に対しては、当然に敬愛がさざげられ、礼拝がなされるべきである。しかるに靈界が立替えられ、浄められてのちも、多神教を無下に迷信邪教とみなすが如きは、重大なる真義を蹂躪することになるべきである。

多神教は、造物主たる根本の大祖神を認めていない。これは、最も大なる欠点である。スエデンボルグは、無神論者はそばによって見れば人間に見えるが、遠くはなれて見れば皆動物に見えるといっている。これは神という意義を、狭義においていったのであって、広義においては、多神教徒は無神論者とはいえないのであるが、出口聖師は、無神論者はけだものであると申されている。これは広義において申された次第のもので、一切の神靈を認めないものの義であるべきであるが、とにかく天主を認めない宗教には非常に大いなる欠陥がある。

多神教は傾向として、一般に御利益本位になり、迷信

に陥ちいるおそれがある。御利益があるといえば、礼拝の対象の高下、善惡を問わず、したがって前記の如く悪魔邪靈をも礼拝するということが事実大に行われてきているはずである。大天主、大祖神にまで立ち帰り、人は神の子たる真実を悟り、神の御心即ち大道を明かにし大道を遵奉し、実践するところまでゆかなければならない。大本においては、大本皇大神ととなえまつているがこれには二義がある。一つは天主に対しまつる奉称であり、一つは天主を始め、一切の正神界の神神（神仏）を合わせて、かく奉称して礼拝しているのである。すなわち一神教的神と多神教的の神神とを合わせ奉斎礼拝しているのである。ここにおいて、宗教の基本における完全を見ることができる次第である。

三 神神の御存在が明かにされなければならない

大本においては、いろいろの面より神神の御存在が明かにされている。

イ 霊眼、霊耳等による場合

靈眼(天眼)、靈耳(天耳)、あるいは靈の鼻のきく人が少なくない。大本の開祖、聖師、日出磨師のごときは想像以上に實際、縦横自在の靈能、靈覺があられ、これら靈能、靈覺のほか宿命通、自他心通等幾多の神通を具有されていた。このことは信者にとりては平坦な事実であるが、由來信者の中にも靈能のある人が少なくなかった。靈眼によれば靈的事物乃至靈界が見える。ただし靈眼にも高低があつて、低い靈眼では、高級の神靈等を拝することはできないといったように段階の相違はある。靈耳の所有者にも段階はあるが、それらの人人は靈界の声を聞き得るのである。いずれにせよその高下にしたがつて靈界の消息を然るべき程度においた見聞し得るのである。これらは最も端的に靈界ないし神神の御存在を明かになし得る事実である。

ロ、お筆先等における場合

大本開祖は、いろいろのいの字もまったく御承知ではなかった。その開祖が二十六年間「三千世界の立替立直」「万古末代つづく神国の世」の建設、出現の大宣言を始

め、二十枚つずりとして約二万といわれる大文章を書かれた。これは人間としてでき得ることではない。神靈の衆格、おはたらきによることたることは簡単に了解せらるべきことである。

ハ 予言による場合

大本の特色の一つは予言である。予言は、これによつて神の国すなわちみろく浄土の建設、その道程などが示されているのであつて、特色というよりも大本存立の根本義的發現であるという方が適切であらう。

日清戦争、日露戦争、世界大戦、日本の敗戦等早くより宣示されている。また聖師の執筆による御神諭に御自身が法難に会い、幽囚の身となられる等については三年前から日まで切つて示されている。信徒は普く熟知せることであるが一応ここに、この事実を掲げておくことにしたい。

大正七年十二月二十二日(同八年一月一日号「神靈界」誌掲載)

三年さきになつたら余程氣を附けて下さらぬとドエ

ライ悪魔が魅をいれるぞよ。辛の酉の年は変性女子に取りては後にも前にも無いような変りた事が出来てくるから前に氣を附けて置くぞよ。

と示されている。「辛の酉の年は」大正十年であり「変性女子」は出口王仁三郎聖師である。更に、

大正八年一月二十七日（同八年二月一日号「神靈界」誌掲載）

辛の酉の紀元節、四四十六の花の春、世の立替立直し、凡夫の耳も菊の年、九月八日のこの仕組。

辛の酉の紀元節即ち大正十年二月十一日、この日京都府警察部長藤沼庄平氏は非常召集令を発し、百十名の警察官を召集し、翌朝、朝まだき、綾部、福知山等の警察官を加えて大本を襲撃した。これが第一回大本弾圧事件である。

「四四十六の花の春」とあるが、「花の春は、よいこと、喜ばしいことがあるということであるが、昭和二年五月十七日、この事件は免訴ということになった。昭和二年は、大正で申さば十六年である。

「世の立替立直し。凡夫の耳も菊の年。九月八日のこの仕組」。「世の立替」すなわち世界の一大破壊のときがくる。それは「凡夫の耳も菊の年」で、耳とあるから菊とかけて申してあるが、「菊の年」は、十六菊の御紋章で、菊の弁は十六が代表的になっている。昭和十六年には、世界大戦という一大立替、一大破壊が起り、それは「凡夫」すなわち人類一般の上に最も顕著な事件として聞き知られる事件である。

その世界大戦という立替の結末、すなわち立直しは「九月八日のこの仕組」で昭和二十六年九月八日にサンフランシスコにおいて日米平和条約が締結されるということである。

ここに四つの日附があるが、皆それが出てきており、サンフランシスコ平和会議の如きは三十三年先きのことである。

人間にかかる先きのことがわかるはずはない。キリストでも、世の終りが来るということは神よりうかがってわかっているがいつ来るかということとはわからないとい

われ、「その日その時を知る者なし、天の使だちも知らず子も知らず、ただ父のみ知り給ふ」と申されている。

されば上記の如く三十三年先きの日附まで示されているということは、正常意識のある人なれば、これによって神の存在が明白にわかるべきである。また大本はいかに正しき大神界の顕現であるかもわかり、また大本彈圧事件がいかなる性質のものであるかもわかり、さらに今後世の終末に関する重大なる予言が真実であることもわかるべきである。

二 天主御存在の宇宙論的証明

天主の御存在については従来、宇宙論的証明、目的論的証明、道德論的証明の三者が大体、その正当性の認められたる証明とされているのであり、大本には三大学則が掲げられているが、上記三者が、三大学則による証明に該当するものと思われる。

三大学則

天地の真象を観察して真神の体を思考すべし。

万有の運化の毫差無きを視て真神の力を思考すべし

活物の心性を覚悟して真神の靈魂を思考すべし。

右三大学則は、真神の御存在が既に認められた上の指示であるが、この三大学則の各前段における場合の觀察覚悟により神の御存在が明かにされるとされている。

今少しくこの第一乃至第二の學則によって略説を試みておく。

天地の真象を観察すれば、そこに、法則、秩序、調和齊一、統一、意味、意匠、目的等があることが感知せられる。これらの事項のいずれか一つを取上げ、少しく仔細に觀察すれば、全大宇宙には、全大宇宙を統一し、支配している意思があり、全智全能的英智があるということに帰着する。全大宇宙にこれを統一し、支配している意思、英智があるならば、その意思、英智の持ち主がある。すなわち神がましますということになる。

簡単に、宇宙の統一についてみよう。地球は、自転しながら太陽の周囲を速い、おそいで飛びながら、平均秒速、三十キロで公転している。地球と太陽とは銀河の中心より約三分の二の所に位し、地球は太陽と共に、否一

千億乃至三千億の恒星(即ち太陽)と共に、銀河の中心を公転し、我が太陽と地球のあたりでは、秒速二百二十キロで飛んで、二億年かかって一回転する。従来の鉄砲丸は発射ぎわの最大速度でも秒速一キロに及ぶものはないのである。さらにまた銀河のような大星団が幾十、あるいは幾百千個、一団となって運動しているのであるが、この大きな運動はまだよくわからないとされているが、宇宙は膨張しつつあるともせられ、地球より一億光年の遠距離にある星は秒速八千キロで、地球より遠ざかりつつある。四十億光年の遠距離にある星は光より速い速度で向うに遠ざかりつつあるということになる。そして銀河のような星団、星雲が、パロマの天文台における観測では三十億といひ、エディントンは一十億と計算している。それらの恒星の約一割くらいは遊星をとまなっているであろうといわれているが、とにかくこの兆京よりも、はるかに多くの星が幾段にも弾丸の幾十百万倍の速度をもって複雑なる大運動をしているのである。それが無統制に盲目的に、勝手気儘に飛んでいるものであるならば、し

ばらくの間に衝突し、引力で張り合わせ、宇宙は渾沌状態に陥ちいらざるを得ないはずである。しかるに永劫より永劫にわたり、そこに天体においても流転が続けられながらも、なおかつ澄み切った宇宙が存続し、生成極まりなき玄化妙育が行われている。この事実、事象をどうして無統制的のものとみることができようか。まことにこの絶大、絶妙なる統一機構を、簡単に物質の発展過程に偶然に出来あがったものと考えるが如きは、あまりにも不靈の考えといわざるを得ない。ここに思つて見たい。日本国民はわずかに九千二百万人といわれている。この九千二百万人がめいめい勝手気儘に、どんな行動をしてもよろしいということになれば、日本はその日のうちに崩壊するであらう。国家がかかる統一性を有し、国民が所を得て安泰に生活しているということは、国家に主権という意思があり、それより法律命令を出して統制し支配しているからである。全大宇宙に大統一があるということは、明らかにこれを統一し、支配している意思があり英智があるからでなければならない。しからば

その意思、英智の主体即ち神がましますということにならざるを得ない。

四 神と宇宙万有の生成化育

宇宙万有は、いかにして発生し、存在しているのだろうか。このことが明らかになれば、宇宙観、世界観、人世観も、その根本義は確立する次第である。いま宗教において説かれてある万有の成立、存在について一瞥し大本におけるそれについて述べることにしたい。

イ 仏教における宇宙観

仏教においては真如が万法（万有）の本体、実在であるとせられている。真如とは、真実如常ということであり、如常の「如」はありのままということであり、如常はありのまま、そのままが恒常不変のものであるということ、ひっきょう、真如はこの上細分変化のない実在であるということである。さき頃、工学博士山本洋一氏は「一切皆空」という書を著し、仏教の空が万有として発現しているのであって、仏教の教義は科学

に背反しない、一致せるものであるということを強調されている。空ということは、何も無い、からということではなく、万有は「諸行無常、是生滅法」で、絶えず流転し、変化しているものであって、個として恒常のものは無い、固定的実体は無いということで、ひっきょう、空とは、真如そのもののことであるが、この空たる真如は、今日の科学でいえば、エネルギー粒子すなわち Eh であるというのである。この Eh は、どのくらい微細な粒子かといえば、「物質をつくる単位の水素原子の一つは h が一秒間に 2.23×10^{23} 個だけ集中固定している状態である」と説明されている。そしてこの h はすでに物質ではないのである。

この真如が、いかにして万有として顕現するかといえば、それは縁起論すなわち因果律で説明する。四段階の縁起論があつて、元来、華嚴の教理で、仏教最高の真理である。その基本縁起論は業感縁起論で、つまり、釈尊直説の十二因縁論である。その十二因縁の出発点は無明であつて、万有はこの無明の刺激によって活動を起し、十

二の因縁の次第をおうて生死、生滅するというのである。ただし無明は何ものであるのか、真如清浄心に無明という迷妄性のあるものが解しがたく、それかといって真如以外に無明という存在が別にあるなら二元論になって具合が悪いという次第で——哲学は二元論を申しむ——今日においては、この無明の扱いははっきりしおらず、むしろ、もてあまされている形である。

要するに仏教においては、宇宙万有の成立の根本素材は真如で、すなわち真如が根本實在であって、色即是空空即是色で、現象即實在、實在即現象で、その奥に造物主たる神のましますことを認めないのである。

ロ キリスト教における宇宙観

キリスト教においては、神は何にも素材のない無から有すなわち万有を創造されたというのである。天主とやらんで物質が存在し、神はそれに形を与えられたのではなく、また神から万物生成の素材が流れ出たのでもないとしているのである。「天主は何等かの素材より世界を創ったのではなく、無から創造したのである」(ローマ公

教要理)「物質並びに霊的な有限的事物を、また少くとも霊的事物が神の實體から流出したのであるという者は排斥せらるべし」(ヴァチカン公会議)としている。スエデンボルグは、「世界は、その全体において無より造り出されたりとは人の言ふ所なり。而して普通の考えにては此無を以て絶対無なりとせり。されど絶対無によりては何物も存在せず。また存在する能はざるなり。こは自明の真理なり。……何の存在もなき無より、存在あるものを造ると言ふは全然矛盾なり」(神智と神愛)といっている。このスエデンボルグの示せるところによるも神が無から万有を創りたもうたというキリスト教の説明では宇宙観、世界観、人生観は成り立ち得ない大なる迷妄に陥れるものでなければならぬ。

ハ 大本における宇宙観

大本においては、天界を分ちて二種とされ、そこに天主は、その二種天界の性格に応じて日の大神、月の大神として現われ給うていると示されている。説明を簡単にするために、神は天界において、大太陽として輝き給う

と申しておく。

全体、神の御姿はいかなる御姿なのであろうか、聖師の聖歌にも

すめ神の御すがたのままに生れ出し人は神の子神の宮居ぞ

と示されているのであって、人間が神のお姿につくられているのであるから、神のお姿は人間の姿なのであるが神の愛より熱を發し給い、智より光を放ちたもうている天界においても、その大光輪しかのぞめないから、神は太陽と顯現されているということになるのである。

神といえども、無より有すなわち万有をお創りになることはできない。その素材が必要である。それは御自体から發せられている熱と光が、万有構成の素材である。今日の科学では、前記の如く、万有は、エネルギー粒子よりなり、これをエネルギー量子というのであるが、光の如きもまた、光子または光子と称せられるものによりなっているのである。つまり波動力学、量子力学までくれば、堅い物質が、光や電磁気と同じものになってし

まうのである。されば、神より發せられる光と熱というエネルギーが万有構成の素材であるということは科学の上よりみるも少しも不合理でなく、科学においていうエネルギー量子は前記のごとく物質ではないとされているが、これが直ちに神より發せられている光熱であるか、この光熱は、エネルギー量子のさらに奥にあるものであるのかは知らないが、とにかく万有の根本素材は神御自身より發出されている光と熱とである。

上記のごとく、神光、神熱がむすばれて万有が創造せられるのであるが、その結ばせる力は、神の言靈の威力であると示されている。（キリスト教新約、ヨハネ伝第一章参照）、この神の言靈はひっきょう、神愛神智より發せられるものである。素材たる神光、神熱も神より發せられたものであるから、いかなる意味においても万有は、神愛と神智の現われである。

素材が神より出されるものであることよりいえば、神は万有の生みの大祖であり、その言靈の威徳によって万有がつくられるということよりいえば、神は万有の創造

者であつて、生成と創造とは神の御力徳發現の両面であり皆神の御力徳に帰一すべきものである。

日本の古典古事記によれば、

天地の初発の時、高天原に成りませる神の名は、天之御中主神、次に高御産巢日神、次に神御産巢日神、之御中主神は並独神成り座して、身を隠したまひきとある。天之御中主神は、大本においてはまた、大國常立大神とも称えまつられおり、天主の御名である。高御産巢日神は、靈、陽、火、男系の祖神、神御産巢日神は、陰、水、女系の祖神にまします。要するに万有は、陽陰がむすび、男女がむすんで生成されてゆく次第であるが、同時に大本においては、高御産巢日神は、神光、神御産巢日神は神温（神熱）とも示されている。

万有はことごとく皆、神より發現、生成されたものであるから、神の分靈、分力、分体であり、したがって神性が宿されているのであるが、人間は最も高度に靈分、神性が賦与されているのである。ここにおいて、「人は神の子」と示されている。これは人生觀の基本である。

さらに大本においては、「人は神の宮」と示されている。本来人は、神の分靈として最も高度に神性が賦与されているのであるが、「大本教旨」に「人は天地經綸の主体なり。神人合一してここに無限の神徳を發揮す」とあり、人間の生命は永遠無窮に存続するものであり、永遠にわたりて神の聖靈を賦与され、神人合一をなしゆき無限に向上するものなることが示されておる。この無限向上と、同じく大本教旨に示されている、人は「天地經綸の主体なり」ということ、これが人生觀の窮極でなければならぬ。

キリスト教は、神を認めて、この神より發現している万有構成の素材たる神光、神熱を知らず、仏教は神を認めないで、神より發現せる神光、神熱という素材のみを認めて、これを真如と名づけているのでなければならぬ。この点においては、易の方が明に正確さがあるといわなければならぬ。易の繫辭に「易に太極あり、これ兩儀を生ず」とあり、太極即ち神より、陰陽の兩儀を生じている次第である。

五 一神教と汎神教も合せなければならない。

仏教は、本来、汎神教である。釈尊は小乗仏教（阿含經）を説かれただけで、小乗仏教たる根本仏教は、無神無靈魂といわれている。その仏教が大乗に發展して、あまたの神神（仏、菩薩、諸天、善神）が現わされているが、それは人間は何かにたよりたい性質を持っているから、旧来の神仏を導入し、または新に生産したのだといわれている。キリスト教は超絶神教であるが、かつて山川智恵博士は、キリスト教的、一神教的信仰と、仏教的汎神教的哲理を合せなければ、今後世界的宗教とはいわれないと論ぜられたことがあったが、この合一は大体不可能だといわれている。しかるに大本においては、上記信仰と哲理のみならず、前述のごとく、その本体、本質においても自然にして当然にこの兩者を合せている。

一神教と汎神教を合せなければ、また大なる不完全を来すべきである。それは、いずれも眞実であるから、眞理の上からも合せなければならないが、愛という立場より考えて見ても、縦に神につながる愛と、横に万有につ

ながる愛とがある。縦に神につながる愛は、非常な強烈性をもつが、巾がなくなり、人類は兄弟であるという隣人愛までは強くはたらくが、万有愛をかく。横に万有につながる愛は一粒の米、一滴の水でも大切にするという普遍愛はあるが、強さにおいて得てかぐるところがあるかく愛という見地よりみるも、兩者は合わせられなければ宗教としての完全性はあり得ないことになる。

以上述べきたったごとく、大本は一神教と多神教とを合せ、また一神教と汎神教とを合せている。宗教の基本において完全であることを知らなければならない。

六 善惡、美醜の存在と神に対する懷疑乃至否定

神が全智全能、至仁至愛にして、万有の産みの親、創造者であるといえ、なぜ大愛、全能の神の創造に悪人や醜いもの、汚いものがあるのか。始めから善人ばかりつくってくださればよい。醜いもの、汚いものなど造らないでおかれたらよいではないか。悪人や醜汚なるものが存在する以上は大愛全能の造物主などは認めがたい、

といい、あるいは認めないというのである。多くの人人は一応かかる疑問を起し、あるいは否定の理念を構成するのであって、あえて反目的の存在をあげたカントをまづまでもないことと思われる。

およそ森羅万象として事物が存在起伏すればそこに無数の差別というものが現われる。差別はそれに、大小、高低、輕重、清濁、善惡、美醜等の名称がつく次第のもので、その性質、様相を異にするの謂いである。仏の善兵衛でも、釈迦やキリストから見られれば低劣なものであろうし、釈迦やキリストでも天主に比すればものの数でもないことであらう。もしこの場合完全性の人間を要求すれば、けつきよく神までゆかなければならなくなる次第で、始めから神同等の人間ばかりをつくって下さらなければ神は認められないということになるであらう。これではむしろ意味をなさなくなる。小野の小町やクレオパトラでも排泄の機関をもち、金殿玉楼にも不淨所のしつらいが必要である。音にも清濁があつて微妙な音楽が成り立つ。生れる法則があれば死ぬる法則もある。部

分的にとらえて見れば、宇宙はあらゆる方面にことごとく矛盾、撞着があり、相反することく見える法則があり、事物があり、万象がある。しかもこれらの清濁、美醜、生滅、矛盾、撞着のあらゆる法則、事象を包んで、なおかつ生成化育、大調和の宇宙が存在し、進展している。そこにわれらは却つて今更の如く無限絶大なる神の御力徳を畏こみ、御力徳を讃嘆せざるを得ない。

七 神は万物普通の靈

「大本教旨」の劈頭に「神は万物普通の靈にして」と示されている。前記のごとく神は人と同じお姿であり、申してみれば巨人に外ならない。しかし、その大光輪のため、天界においては太陽、日の大神と顕われたもうている。しかるにここには「神は万物普通の靈にして」と示されている。

この事柄を了解するには、靈界は想念の世界であつて現界的三次元乃至時間をとりにこんだ四次元の世界とは異つた、超次元の世界であり、想念の上に時間や空間が伸

縮、展開する世界であることを知らなければならない。

靈界は、かかる想念の世界であり、神の御想念は無限大であり、自在であるから、神は、「至大無外、至小無内」と示されている。大は宇宙を包み、宇宙に遍在したまい小は全神格を以て素粒子の極微の中にも鎮りたまうのであるから天界において大太陽として輝きたまうと示されていて、宇宙に遍在したまうと申しても矛盾する次第ではないのである。超絶神を説くキリスト教においても

エホバいひたまふ、人我に見えざる様に密なる処に身を匿し得るか、エホバいひたまふ、我は天地に充つるにあらずや。(旧約エレミヤ記二三の二四)

凡ての者の父なる神は一つなり、神は凡てのものの上に在し、凡てのものを貫き、凡てのものの中に在したまふ。(新約エペソ書四の六)

とあり、マホメット教には、

東も西もアルラーハに属す。汝等いづれの方位に向ふも、其処にアルラーハは遍在者、能智者なり。(コ

ーラン二の一五)

と説明されている。

中国の道院においては、

至聖先天老祖老祖は万教の初祖。亦即ち天地万有を生ずるの祖^そ焉^を為り。……謹みて^そずるに至は以て復た之に加ふるの詞無く、聖は大にして之を化するの謂、先は前無きの意、天は自然の称、老は孟子の所謂天下の大老、猶天下の父と言ふが如き也。此の所謂老は猶天地万有一切種種の父と言ふが如き也。祖は爾雅(辞書の名)の訓に始めたるの所謂祖、即ち所謂無名は天地の始め也。此六字は是れ五教の教主(釈迦、キリスト、老子、マホメット、項^{こう}橐——孔子の師)恭しく尊号を上る。今既に五教を合して一家を為す。当然別つに一つの最尊無上の聖号を上り、形容を以て讃嘆する也。故に何教たるを論ずること無く、均しく当さに此の巍巍の主を明かにすべし。乃ち一靈万象を孕み育て万象宏く含み、後先徳を合す。円融を極め又普遍を極むる者也。又何ぞ妄りに高深を測らん哉(進徳須知)と説明されている。

七 大本信徒の神に対する種種観

天主、大本皇大神、天之御中主大神と申し上ぐれば、簡單明瞭にして、くりかえしていえるごとく無始無終の大元靈、大祖神、独一真神の御事であつて、そこに何等の疑義の存する余地は無いはずであるが、人間のもの事のとりようはいろいろで、この根本大祖神に対してすら種種に取りちがえられたる神観が立てられていたのである。今日でもまだそういう神観がなかなかぬけきれないでいるものがあるので、その重なるものを挙げておくこととする。

イ 汎神論的神観

浅野和三郎氏がその著書に「宇宙即天之御中主大神であります」と記している。浅野氏は大本成長の初期に来た先覚といった人であつたので、一般信者にとりては、そのいうところはすなわち大本の教義そのものなのであると受けとられたため、この「宇宙即天之御中主大神」なりということが信ぜられてきた。

宇宙、自然がそのまま神であるという考え方は、ひつきよう汎神論なのである。仏教汎神論の根本たる真如は理体（法則性のもの）ではあるが智体ではない。であるから人格性が無く、祈れば聞かれる神ではないから「如来」が説かれている。如来というのは「真如の道に乗じて来る」という意味で、真如がすでに存在し、そこに道があり、その道を証得し得たものである——仏も如来も同じものである。——真如から出てきた如来は、とうてい、真如のさらに源である天主であるということにはなり得ない次第である。とにかく、万有の創造者は、万有そのものではない。

西洋においては、イタリーのジョルダノ・ブルーノが汎神論を唱え、正統の信仰に甘んぜず修道院を脱して各地に流浪し、瑞、仏、英にのがれていたが後、イタリーに帰り七年間牢獄に投ぜられ、宗教裁判にかけられたが、自説を曲げずして千六百年に火刑に処せられた。その後スピノーザ、ヘーゲル等によって汎神論が充実され、ホイエルバッハはヘーゲル哲学に参研して、無神論

を唱え、マルクスは、ホイエルバッハを学んで唯物論を唱えた。汎神論も大体二種類あるのであるが、要するに超絶的独一眞神を認めないものであり、その意味においては無神論であるというべきである。

今や見ようによつては、世界は唯物論とそうでない二つの陣営にわかれて葛藤をしているような有様であるが汎神論にかかる歴史的の事実、帰趨にかんがみても大本における汎神論的信者は、最も重大なる神観を軽々に附し去らず、日夕、大本皇大神と唱えながら、自己を拝んでいるごとき迷妄より脱却されたいものである。この頃ある事実に直接して特にこの感を深くせる次第である。

浅野氏等によつて非常の過誤に陥ちいらされたということが事実ではあるが、この過誤によりさらに誤った説明、解釈がなされて、誤りが繰り返されてもいる。

靈界物語に

- 一 宇宙の本源は活動力にして即ち神なり。
- 一 万物は活動力の発現にして神の断片なり（六十七

卷）

と示されているのである。

大本においては「神は愛なり力なり」とも示され、神の御本質を愛と力を以て示されているが「宇宙の本源は活動力にして即ち神なり」ということは、宇宙万有の本源は神であつて、宇宙そのものが神であるということではない。光の本源は太陽にしていえば、光は太陽から流れて出たもので、光が太陽そのものであるということではない。「万物は活動力の発現にして神の断片なり」ということは、万物は活動力たる神より発して現われたものであつて、たとえば、私が私の鼻をおさえて「この私が」と申した場合のように、鼻が私を表現し、鼻は私の一部であるのと違って、表現ではなく、神の一部、一構成細胞でもなく、切りはなされた断片なのである。であるからこれらの説示の後にまた、「人は神の子神の生宮なり。而して又神と成り得るものなり」——「神と成り得る」とはもとより神神即ち天使たる神神になり得ると申すことで、天主そのものになるということではない——と示されている。しかるにこの説示をとりあげて、

宇宙そのものがすなわち神であり、万物は神の表現であることが説かれ、汎神論的念入れの説明がされたこともある。

大本の祝詞「感謝祈願」の前文即ち感謝の全文を見来るも極めて明瞭なるものがある。

至大地球の司宰にましまして……ももち、よろづの大元霊大天主太神の大稜威を以て、無限絶対無限無始無終に天地万有を創造給ひ……賦与給ひ……生成給ひて万物を愛護給ふ。……

至大地球すなわち大宇宙の司宰にましまして、万有の大元霊大天主太神がどうして宇宙そのものであり得るのかその他これに続く文章を見ても遺箇の理事は明白にして考慮の余地のある次第のものではない。「天地初発之時より陰身給ひし大天主太神」であらせたまうので、肉眼に見える自然や宇宙ではあり得ない。「天津祝詞」には「高天原に大天主太神あまたの天使をつどへて」とあり「神言」には「大天主太神の命もちて、八百万の神たちを神集へに集へ給ひ、神譲りに譲り給う」神であって宇

宙そのものではもとよりあり得ない。日夕これらの祝詞を神前に奏上していながら宇宙即天之御中主大神と観念している人が少なからずあるのは、むしろ驚くべきことである。

ロ 物活論的神観

次に万物には生命がある。砒物にも生命がある。これは生命がひそんでいるのである。植物にも生命がある、これは眠っているのである。動物にも生命がある。これは目をさましているのである。人間には精霊といって最も精妙なる生命がある。要するに万物に生命があるのはすなわち普遍の霊があるからである。大本教旨に「神は万物普遍の霊にして」と示されている所以で、この総合的万物普遍の生命がすなわち神であるというのである。

「万物普遍の霊」の意義については、前に説述しておいたが万物に存する霊は大元霊たる神より賦与されたる霊であって、これは神の御分霊たるに過ぎないものであり、神御自体でない。この万物に生命があるとする説は物活論というのであって、ギリシヤ時代よりあったもの

であるが、文芸復興期の自然哲学にも同様の傾向が現われ、近代に至って物活論は、自然科学殊に有機科学の研究の結果よりして幾多の材料を得て復活してきているということである。

ハ 自然は神の体と観るもの

次に自然は神の体であるというものがある。三大学則の「天地の真象を観察して真神の体を思考すべし」とあるので、天地自然が真神の体であるというのである。したがって、われわれの体もまた神の体であるということになるが、これは前記物活論者は、物質そのものに本来生命または活力が有るとなし、ストア派は具體的精神論をとり、神は宇宙の靈魂、世界即ち自然界は神の肉体であると説いたので、この自然は神の体であるというのは前記物活論の半面をなす次第のものである。

その他過去においては、真如が神であるが、真如は深妙にして、人間にはわからないから、大本の神はけっきよく如来神であるとか、祈れば通ずるという神は古き觀念の神であって、大本の神は理神論的神であるとか、神

は超絶的のものであるのか汎神論的のものであるのか所詮人間にはわかるものではないとか申した人もあるので、「世界の型の出る大本」としては、あらゆる方面に世界の渾沌もうつるのであるから、大本の神示、大本の實際よりいえば、最も基本的重大事たる神観においてかかる渾沌が存した事は当然でもあったのであろうが、今日では大本教学の本筋としては、かかるあいまいは消えうせて、神光照照として輝きたまえるのを拝し得ている次第である。

神について申すことは、もとよりはなほだ広く、多き次第のものであるが、特に大本は神御自身の御顕現により天啓によってたてられた教団であるから、その顕現したまい地上、永遠の神國建設の大宣言をなしたまいし大地の主宰神等に関するきわめて重大なる事があるのであるが、今ここにはこれらの事にわたらないで、申さば神に関する一般的記述をなしたに過ぎない次第である。

大本教典の範圍

一、大本の教典

宗教の三要素は、仏者のいはゆる仏法僧でありまして大本でいへば、神様、教典、宣伝使ということになります。しかし、本尊である神様のことは、人間としては教祖となる人でないと判りませんし、宣伝使の優劣によつても、その宗教の眞価は本當に判りません。宗教の眞価を人として調べる唯一つの道は教典の内容の調査のみであります。出口聖師は

◎出口王仁三郎全集第一卷国教樹立論一一三頁

第二 我国には国教に樹立すべき程の教義ありや否や

木庭次守

この問題は、一面國体論者の單純な考へから謂へば何の難作も無いやうな問題で、本居、平田翁の神道觀を始め、現代ならば井上博士、寛博士等の所説を以てして、善いかも知れないが、之を専門の宗教上から論ずる場合には、非常に重大な諸問題が其の間に起るべきである。

先づ差當り、左の諸項に対して、解答を与へねばならぬ順序である。

一、大本教は、現在行はるる所の諸宗教、諸教義を統一すべき資質ありや。

二、大本教は、現在存在する諸宗教、諸教義以上に有

力にして、善良なりや。

若しも大本教が、現在存在する諸宗教諸教義を統一するの資質がないならば、日本国教の統治力総攬は不完全であり、欠陥ある事を免れないものと謂はねばならぬ。何故ならば、諸宗教諸教義の一つでも統合し、網羅する事が出来得なければ、当然其の抱擁力以外に出づべき、或部類のある事を、否定する訳には行かないからである。或は若しも、統一力を充分に有して居たとしても、夫れだけで大本教が、優秀なるものでなければ駄目である。何故ならば、如何に抱擁力に富み巧に統一したからとて、其のものの自体の資質が、現在行はるる或物よりも、何等かの点に於て、善良なるべき徳に欠け、乃至は權威の存在を認むる事が出来なければ、国の根本教義とし、国自体の全分の信頼を託する事が出来ない事となるのは知れ切った事柄である。能く出来上ったものが、古今に通じ中外を一貫して発揚さるべき性格をかくやうな、偏狭固陋な教義を建て得意がるやうな事があったり、乃至平等の主張に陥

って、權威も無く、熱誠もない、茫漠たるものが出来たりなぞするのは、到底変哲学者の妄想たるに止って決して大本教の実現を見る事は出来ないのである。国教樹立は、如上の諸問題に對して、完全なる解決を有して居らねばならぬ次第である。

大本教は諸宗教、諸教義の統一的資格を有し、且つ完全円満にして、国体の根本基礎をなし、中外を一貫し、古今に通じたる權威である事を要するのである。

大本教が如上の資質を有すべきに就ては、先づ最初に国教樹立の根基を為すべき、主典の穿鑿せんさくから、創めねばならぬ次第である。

大本教は、主典として何を採用するのであらうか。

大本教の主典としては曰く、「大本神論」、曰く「古事記」、曰く「日本書記」、曰く「延喜式祝詞」等を重き典籍とし、次で古語拾遺、旧事記、本朝六国史万葉集、倭姫世記等に至るまで、皆悉く、依典とはするけれども、就中古事記並に大本開祖の神論を主典と爲すのである。古事記は其の序文に陳べてある如く天

武天皇の御詔勅を奉じて編述されたるものにて、序文の一節に、実に次の如き事が記されてあるのである。

朕聞諸家之所齎、帝紀及本辭既「違正実」、多加「虚偽」、当「今之時」不「改其失」。未經「幾年」、其旨欲「滅」之、斯乃邦家經緯、王化之鴻基「ナリ」焉。故「惟」撰「録」帝紀「討」覈「旧辭」、削「偽」定「実」、欲「流」之「後葉」。

古事記を以て大本教の主典と為す事は、何人にてても異存のあるべき筈がないものと信ずるのである。

今や世界の趨勢が、歩一步と統一を欲求し、大教義の發現を切望し、大救世主の出現を冀待する事の切なる有様は、識者の之を洞察するに難しとせない所である世界は修羅地獄のドン底までも、墮落し行くのである而して修羅地獄のドン底に到った時に、救世の日の大御旗は其上に輝くべきである。大本教は、世界を救ふ所の、唯一の根源であり且使命である。

大本教の發揚さるる源は、古事記奥義の發揮である古事記の真意義の發動である。古事記秘奥の解せられ

ざりしは、時機が之を許さなかつた為である。天津金木、日本言靈法の發展、開祖の神論に由りて古事記の真解されたは、全く時機相応の所以である。

古事記には哲學的方面の解釈と、倫理方面、宗教的方面の解釈がある。本題目としては比較宗教学の立場からして、既成宗教に対して、些細の比較討議を為すべきであるが、紙面の狹隘なるが為に比較の討議は可^ま成的^{べく}避けて、古事記の真義を略述するの傍ら、諸種の方面に、些少の比較を試むるに止めねばならぬ次第である。其比較討議の如きは、各自専門方面に於て、読者が個々になされんことを、切望するの止むなき次第を、御賢察が願ひたい。大本教は（中略）古今を一貫し、内外を隔てぬ天上地上の權威である。大本教は、古事記主典の哲學的研議に歩を起し、漸次本壘に突進するのである。

と述べられましたように、大正七年當時の大本としては教典は左の如くでありました。

主典 大本神論 古事記

依典 日本書記、延喜式祝詞、古語拾遺、旧事記、

本朝六国史、万葉集、倭姫世記

しかし出口聖師の明治三十一年からの開祖の神諭の解説書としての裏（緯）の神諭の発表に引続き、神示の靈界物語を初め、多くの教典を執筆発行されましたので次に、教典が完備充実してまいりました。

◎玉鏡一五二頁宣信徒よ

王仁は長い年月、宣伝使や信者のために神様の教を宣傳へて来た。七十二卷の靈界物語を初め、王人文庫道の大本、道の榮、毎月々の神の国、真如の光、昭和明光等々出来得る限り神様の御旨を伝へて居るのである。歌集「東の光」が一冊あっても十分道は説けるのである。他の宗教を見よ、宗祖の現はした根本教義と云ふものは、本当に僅かなものである。（中略）それでも彼等の布教師などは、その僅少な教義をもって布教して居る。王仁はあらゆる方面に亘って書きに書いて居るのであるが、月々の雑誌にまだ書いて呉れゝとせがんで来る。一体大本信者はさうした点に於て、

贅沢である。それも十分それを読んで、消化してゆくのならよいけれど、碌に読みもしないで次から次へと書く事を要求する。若し皆が本当に読んで居るなら、皆の働きがも些し違つて来なければならぬ筈である。王仁が天からどういふ使命をもたされて居るかといふ事が十分解つてをれば、其使命を果さすやうに一致協力後押をして呉れるが本当ではないか。金棒をもたぬおにのやうな有様では何の働きも出来ぬ。悪魔の活躍は日に日に猛烈になつて来る。君国の為に、人類の為に、最善を尽したいと、王仁はもがいて居れど、皆は吞氣である。神書の読みやうが足らぬから、王仁の使命と仕事に理解がない。靈界物語の続きを早く出して呉れとの請求があるが、幾何出しても、読みようが足らないで、神意が理解出来ないやうな事では、神様が出して下さらぬ。せつせと読み、御神意を理解し其思召に添うやうに働きをせなくてはならぬ。

「東の光」自序

本歌集「東の光」は大本信徒の為に、折にふれ時

に臨んで示したる道歌体の作歌にして、單行本、神靈界神の国、昭和青年等に發表した断片を（中略）吾が歌集の中に加へ発刊する事にしました。（下略）このお話の時から引続き出口聖師は

歌集十一卷

歌日記五十三卷

靈界物語天祥地瑞九卷

出口王仁三郎全集八卷

神聖（月刊推誌）

統管隨筆第一編及第二編

等を發行されてゐるところに、昭和十年十二月の八日の第二次の大本彈圧事件が突發したのです。

その後、出口聖師は、昭和十七年七月三十一日大阪控訴院にて治安維持法違反事件が無罪となり、八月七日に六年八カ月の未決拘留を解放されて保釈出所されますとさっそくその日から、染筆を開始されました。十月十七日一切の事件が無罪となりまして昭和二十一年八月二十六日腦溢血にて病床につかれるまでに、「教えられたお

言葉」におよび「数万のお歌」（本部保存一万五千首）等によつて、ますます教義に精彩を加へてゆきました。昭和二十三年一月十九日出口聖師の御昇天によつて、いよく大本の教義教典はここに完結したのであります。したがつて、代々の大本道統の継承者である教主は、以上の教典にもられたる大本の教義教理を遵奉して、二大教祖の三千世界改造の救世の神業を継続奉仕されるのでありますから、大本教法には、このことを要約してあります。

大本教法第七章（教典）

大本は、二大教祖によつて伝達啓示せられた経緯の神論、並びに靈界物語にもとづき、教主の裁定發表されたものを教典とする。

この教法第七章の意味は、大本の教典は大本神論と靈界物語および二大教祖の伝達啓示された聖言のうち、大本の経緯の神論及び靈界物語の中から教主が裁定して發表されたものを指します。

右の次第ですから、二大教祖（開祖と聖師）の文献中

のもので神論と靈界物語の精神に合致したものが大本の教典でありまして、その他の人のは教典とは申されません。仏教では釈迦の教のみが経文であり、キリスト教ではキリストの言葉を集めたバイブルのみが教典と申しますのと同じであります。

大本では教典のことを神書と申しております。

これから大本教典の種類について説明させて頂きたいと思ひます。

一、大本神論

表（経）の神論

◎靈界物語第七卷総説に

「教祖の直筆は所謂お筆先であり、その筆先を神示に随つて、取捨按配して發表したのが大本神論である。

之を経の筆先と称して、変性女子の緯の筆先と區別し経は信ずるが、緯は信じないと謂つて居る人々が、処々に散見される様ですが、経緯不二の真相を知らんと思へば、教祖の直筆を御読みに成つたら判然するでせ

う。……」

に示されました様に、大本の経（表）の神論は大本開祖が明治二十五年正月から國祖國常立尊の婦神によつて叫ばれ明治二十六年四月から大正七年旧十月三日（十一月六日）まで婦神状態にて示された神筆所謂お筆先（約一万巻）を、出口聖師が神示に従つて取捨按配して漢字まじりにして發表されたものであります。最初は神靈界誌上に大正六年一月号から大正十年四月号までに發表されましたが四百三十四日分があります。

緯（裏）の神論

表の神論を平易に解明するために、出口聖師に坤金神豊雲野尊、素盞鳴尊、小松林命が婦神されて啓示されたものを裏の神論と申します。明治三十一年高熊山修行下山から大本開祖御昇天（大正七年十一月六日）までの出口聖師の婦神の神筆である。この神筆は明治四十二年からの「直靈軍」「敷島新報」「このみち」「神靈界」「神の國」誌上に掲載發表された。後に単行本として「裏の神論」「道の本」「道の榮」「王仁文庫、道の本」

同、多満の礎」「同瑞能神歌」「祝詞略解」

と改題して発行されました。

単行本とならないものに明治三十五年頃執筆して「筆のしづ九」として神霊界に掲載発表されたものがあります。

◎出口王仁三郎全集第五巻野天狗放言五三〇頁

大本の裏の神論は新約全書に酷似して居るから面白く無いと云った人がある。厭なら別に読んで貰はいでも構はぬ。キリスト教でも仏教でも儒教でも真理は何処迄も真理だ。幾万年以前から火は今に熱いもの、水は冷たいものと云ふ事は変らぬのだ。つまり真理だから変らぬのだ。大本の神論が万々キリストの教に似たとすれば猶更結構でないか。我惟神の大道を研究しつつキリスト教が解って、所謂一挙兩得と云ふものだ人間の心の狭い雅量に乏しいものは到底神界の経綸の判るものでは無い亦キリストの教典は必ずしも欧米の特産物では無い。東洋の古文書を詳細に調べて見たら皇国の大道に淵源を發して居ると云う事が判るのであ

る。

◎出口王仁三郎全集第二巻神政復古の本義三七九頁

神典の研讀に因りて仏教が日本国教から出た事を明確に知り得たのであります。耶蘇の教義も日本国教を恋慕する声であること、支那に起った各種の教義も皆悉く大日本国教に根基ある事を立証し得るのであります。

伊都能売の神論

神論の裡に特異性のあるもので、伊都能売魂として發表されたものがあります。これは大本開祖御昇天直後大正七年の末より大正八年にかけて、国祖国常立尊が出口聖師に帰神されて、大本開祖の水洗礼の神業が明治二十五年から大正十一年までの三十年間であるのに大正七年大本開祖が昇天されたために残りの三年間の神業を輔佐するために發表された神論のこととあります。嚴瑞二神合一の神論でありますから伊都能売の神論と申すことができます。内容は大本開祖の二七年間の神声神業の總括であり、又未来に対する大神勅であります。この神論の

総数は三十六日分であります。この神論は神靈界大正八年分の誌上に掲載発表されております。

靈界物語第四十卷第六章仁愛の真相に

經と云ふ字は經糸と云ふ字だ。今迄の教は凡て經糸ばかりだ。緯糸がなければ完全な錦の機が織れない。それだから既成宗教はどうしても社会の役に立たない。

經糸ばかりでは自由自在に応用する事が出来ぬ。三五教は国治立尊様の靈系が經糸となり、豊国姫尊の靈系が緯糸となり、經緯相揃ふて完全無欠の教を開かれたのだから、如何しても此教で無くては社会の物事は埒があかない。要するに今迄の凡ての教は未完成だ、未完成品と云つても宜い様なものだ。故に三五教では教典を經文ともコーランとも云はず神論かみろんと称へられてゐるのだ。

と示されたとおり、開祖の筆先も（經の教）、出口聖師が神示によりて漢字交りの經緯揃うた教として神論とされたのであります。故に大本神論がすでに、經緯揃った教となつてゐるのであります。そうして靈界物語にな

りますと、完全無欠の經緯揃つて織りあげられた錦でありまして、仏教でいふところの、弥勒胎藏經となつてをるのでありまして、宣伝歌の「三五教の御論しは最後の光明良なり」といふことを教の中に実証してゐるのであります。

三、靈界物語

大本にては、出口聖師の婦神の作である靈界物語のことを釈迦の予言した弥勒胎藏經と申しております。

神歌（東北日記七の卷二八四頁）

楽々と神世の謎を説きさすミロク胎藏の物語かな

◎靈界物語第十二卷序文

教祖御筆先と靈界物語に就て、少しく所感を述べて置きます。抑も教祖の手を通して書かれた筆先は、到底現代人の智識や学力で之を解釈する事は出来ぬものであります。如何となれば、筆先は教祖が靈眼に映じた瞬間の過現末の現象や、又は神々の言靈の断片を惟神的に録したものですから、一言一句と雖もその言語の

出所と時と位置とを靈眼を開いて洞觀せなくては、其真相は判るものではありません。(中略)

故に神様は、三千世界の大芝居であるぞよと、筆先に書いて居られます。其各自の台詞書せりふがきを集めて、一つの芝居を仕組むのが緯の役であります。故に靈界物語は筆先の断片的なるに反し、忠臣蔵の全脚本とも云ふべきものであります。筆先の中にも、智慧や学では此筆先は到底判るもので無い。因縁の靈魂に神界の實地が見せてあるから、其者と直とでなければ筆先の精神は判らぬぞよ、と記してあるのを見ても判りませう。又時と位置とに因りて、筆先の文句に異同あるのも当然である。輕々しく筆先は人間の論評すべきものではありません。

要するに、太古の神々の活動を始め、現在未來の神界の活劇を、断片的に示した台詞書に過ぎませぬ。之を一つに取まつてその真相を劇化して、完全に世人に示す様にするのが靈界物語編纂の大使命なのであります。(中略)

故に緯役は大正十年旧九月十八日、教祖の神靈の御請求に由つて病軀を忍び臥床の儘靈界物語を口述することと致しました。(中略)

併し靈界物語は歴史でもあり、教祖の筆先の解説書であり、確言書であり、大神劇の脚本であります。この物語に依らなければ、教祖の筆先の断片的(台詞書)のみにては、到底神界の御経綸と御意志は判るものではないのであります。(中略)

筆先と靈界物語とは経緯不離の關係にある事を考へて貰ひたい。

◎東の光「言華」(一二)四四九頁昭和五年六月瑞月が口述になる物語古今聖者の言葉も織り込む自湧的物語とは言ひながら聖者の言は採用なしあり現今の著述何れも東西の古今の知識採用せるのみ参考書一つ持たねど強記せる言葉は諸所にあらはれにけり

小心な読者は酷似の文章見て剽窃などといきまくものなり

かむながら神より出づる言の葉も現世に對せば人言に同じ

古今東西賢者のつくりし名文はみな口述の材料なりけり

まだ人の夢にも知らぬ神界の奧義を漏らす靈界聖談世の中の著者の心も天地の神にかなへば同意の文書く一切の著述は古今東西の聖賢の書に由らざるはなしよき言辭論旨はこれを採用し生かして使ふは學者の道なり

聖談の中に織り込む言の葉の先哲に似しは経綸のため先哲の言葉と文書を用ゐずば社会諷刺の著述は生れずたまさかに學者の言葉ありしとて驚く小心ものの可笑しさ

天も地も古今東西かはらぬ限り真理語れば一徹に出づキリストも釈迦も孔子も哲人も弥勒出世の先達なりけり
みろく神百の學者に靈懸けて持ち場持ち場を語らせ給へり

古今東西聖者の説をとりまとめ活かすはみろくの働きなりけり

世の中の総てのものは弥勒神出世のための経綸なりけり

世の中の総てのものは弥勒神出世のための経綸なりけり

無限なる世の物事を一人して為す間なければ先驅を遣はさる

古今東西一切のものは弥勒神出世のための先き走りなる

四、絵も歌も教の一表現

大本の経緯の神論と靈界物語及び神論と物語の大精神にかなった教祖のお話を教典とすることは今まで述べましたが更に出口聖師が

絵に歌に書に冠句に天地の

蘊^{おく}奥をさとす三五の道(東北日記七の一八七)

と示されましたやうに、二人の教祖の書かれたものは、絵も歌も書も冠句も、大本の教を示すための一つの表現

であります。

五、二大教祖の言行は教典の実証

大本は神靈したしく二大教祖に帰神したも。うて三千世界を教道するために実地に神劇を行い、雛形、鏡を出してゆく地上唯一の聖団でありますから、従来の宗教と異りまして、出口開祖と出口聖師の一言一行までが、大本にては活きた教典の実証とされております。

◎王人文庫第五篇道の大原第一章

教・一・教・とは・天・授・の・真・理・也・。総て教なるものは、今日の人智を以て測り知る事の出来ぬもので、智徳円満豊備なる神の直々の教でなければ、教と云ふ資格は無いのであります。彼の仏教の十戒と曰ひ、キリストの十戒と曰ひ、其の他神仏開教者の、今迄に立たる戒律なるものは、悉皆倫理上の学説を出る事は出来ぬのである(中略)人は省る、恥る、悔る、畏る、覺るの五情の戒律を、靈魂中に天賦的に附与されて居るに於ておや盗む勿れ、殺す勿れ、姦淫する勿れ、等の戒は、人類

自然に知悉して居る筈であります。之を言霊の上より解釈する時は、

(二) お天の浮橋也。高遠也。

し知る也。基也。台也。

え愛也。心の結晶点也。

(お) (一) 天の浮橋也とは、幽遠微妙の神理と、神界の経綸を、一大真人通じて人界へ顕示し給ふ其機関を曰ふのであります。

(二) 高遠也とは、棹は如何に長くとも天空の星には達せず、飛行機は如何に高昇するとも月界に到る能はざる如く神界の経綸は、人心小智の窺知し得る所では在りませぬ

(し) (一) 知る也とは、宇宙一切を支配して、余す所なきの意なり。

(二) 基也とは、一切の根本は神より出づる也。神より出でざる人爲の

説は、眞の実力無く、權威なきものなり。

(三) 台也とは、知るは総ての事の土台にして、土台の上に建てる家屋は転倒する事なし、神界より伝へらるる教も亦斯の如くであります。

(え) (一) 愛也とは、神の教は眞仁眞愛の

至情より出づ。故に、天下万民、是に由つて安神し立命し、化育するなり、生成するなりであります
(二) 心の結晶点也。心とは勇、智、愛、親、四魂の合同也。日本魂是より発生し、天功に代る大業を成就するのであります。

要するに教なるものは、過去、現在、未来に通じ、かつ実地に神明、人に憑りて、善惡邪正の模範を示し、世界の現状をつぶさに顯示したまふが故に、一として違ふ

とこなし。神論に誠の神の教は、毛筋の横巾ほども違はぬぞよと、現れ在る所以であります。二十七年間の神論と変性男子、女子の神務と対照すれば、神界の深遠なる御経綸の一分を了知する事が出来るのであります。

六、教義の解釈

大本の教の内容は、「宇宙造化神の経綸」および「主神の大精神」でありますが、この点を理解できるのは、二大教祖に限定されておりますから、教義の理解は、教祖の御教に従順であることが、もっとも大切でありますし、「出口直には書き放題にかかしてあるから、変性女子は世界の書物をしらべて筆先をこまかう説いてきかせて世界の神や人民を改神させるお役である」と神論に示されたように、出口聖師の教説によって、すべての大本教義を理解することがもっとも肝腎なことでもあります。

したがって靈界物語の大精神を通して、大本神論を始め、大本教義一切を解釈してゆくことが、一番大切なことであります。

◎出口王仁三郎全集第二卷第三篇宗教統一第三章世界
宗教統一、一四〇頁

神論は中々御神意がとり難いから、神様の前で、お経を読むやうな考へで拝読したらよい。こう考へる位迄はよいが、もしも断定的に解釈をした場合は、全然違ひますから、靈界物語に御神意が出してあるのである。神論を勝手に解釈することは、神様から、許してないのであるから、もしも之を解釈すれば、神を冒瀆する事になるのである。(大正十四年三月二十八日講話)

結び 大本教典教説の範圍

出口聖師は

「今までより広い大きい考へで世を導く精神にならねばならぬ。大本は大本の大本でもなく、また世界の大本でもなく、神様の大本、三千世界の大本であることと取違ひしてはならない。」(出口王仁三郎全集第二卷一三一頁)

「大本は宇宙の大元靈なる幽の幽にましますところの、吾々の目にも見えない、耳にも聞えない本當に世界唯一の神様の意志を私と開祖様が伝達使となつて表示したものを、その儘に自分の考へを加へず、世の中へ伝へるのでありますから、宣伝使と云うのであります(中略)神様が直接に伝達された教をその儘間違はない様に宣伝したならば、世界一の学者であります。別に今から色々なものを研究せなくても、神から示された大本の教理をその儘誤らず説いたならば、大本は本當の神から、直々の教理が出来て居るのでありますから、世界に沢山ある学者は、恐るゝに足らぬのであります。(中略)かういふ科学万能の世の中、宗教の殆ど破産した世の中に宗教も生かし科学も生かし、あらゆる哲学に生命を与へる所の靈力体の三大原則の教を樹てたこの大本は、今迄どんな智者学者もこれを唱へたことのない天啓の教理であります。五大洲にどんな学者があつても、どんな博士があつても、この靈力体の三大原則に対しては、なんとも云ふ事が出来ない

のであります」(全集第二卷九〇頁)

「宗教の宗の字は、国語にて宗と訓なず、宇宙一切の経緯を示すと云ふ意味である。ウ冠のウは、天地万有一切を生み出す神の経緯と云ふ言霊であり、下の示すと云ふ字は、天地人開くと云ふ意味である。宗教と云ふ意味は天地人一切に関する根本の真理を開示し、神の意志によって人心を導き、民ををさめ、一切の万有を安息せしむべき意味が含まれてゐる。故に宗教は、

天文、地文、政治、教育、芸術、経済、其他ありと所在ものに対し、根本的解決を与ふるものの謂ひである。」(惟神の道七七頁)

と教えられましたように、大本教典教説の範圍は、宇宙の真相、人生の本義はもとより、哲学、宗教、政治、教育、経済、芸術等の人事百般にわたって解明してあります。

大本史観について

喜 多 哲 良

大本の教義は、御神論と靈界物語に、明確かつ直截に開示されており、そこにその根拠をもっていることは申すまでもない。そして、その教義が「時間」換言すれば「歴史」の観念を除外しては、なり立ち得ないこともまた、何人も異論ないところであろう。その限りにおいて大本の教義を貫ぬく歴史観をその基礎構造について述べつつ、その生けるものとしての素描を教義との関連において自覚しようというのが、ここでの主眼なのである。繁をさけるために、出典を、もっぱら御神論にのみ求めることにする。

まず時間構造から考えてみよう。時間が時間として成

立するためには、つねに一定の基点(時点)が決定されていなければならない。常識的にいえば多くの場合、現在という時点から、あるいは遡及して過去へ、あるいは期待する将来へ、という時間連続を考える。しかし、時点を現在におくか、未来または過去におくか、そのいずれにおくかによって、時間をその特定の時点から集約することの必要性から、時間の理論構造を異にしてくる。それは単に時間理論のみでなく、一般の思想、哲学、宗教教義等にわたって、その全構造の成立に重大な関係を持ってくる。時間はそれ自身、存在と永遠を内に包含して、その実質的意味をなしているからである。存在は時

間ぬきには、その本来の意味を開示することはできないし、時間はまた永遠と一如においてのみその本来性を開示するが故である。その詳説ははぶくとして、時間構造がつねに、特定の時点の上に構成されなければならないことだけは確かである。さて、大本の教義の体系から、その特定時点を何処に求むべきかは問題である。結論を先に記せば、「三千世界一度に開く梅の花、良の金神の世になりたぞよ」の明治二十五年旧正月における初発の神示を、全教義体系との関連において、その意味するところを考察するとき、これに時点をおくことが妥当ではないかと考える。

「良の金神の世」すなわち世界の主権は良の金神に帰属する旨の神示が、この時点に生起するとともに、これから教義の本来的意義が開示され、またその点に集約できると考えるからである。この世界への宣示はまた、つづいて「元の神世に立替、立直すぞよ」の神示と相關的に考えあわせるとき、さらに、この時点が教義体系において、どのような基盤関係をなしているかが理解されて

くる。この時点から遡及して「元の昔」の神世へ指向するとともに、「立替、立直し」を経て「神国の世」「松の世」「みろくの世」への展望の、過去と未来の接合的時点をなしている。また、この時点あって神の大愛の対象である「世界の人民」の「改心」「身魂磨き」が「立替・立直し」「大峠」等との関係において問題となり、それは、実感として神の「せける」ことにもなるのである。この実感は、それ自身未来をはらんでの神の大愛の涙ぐましい、生々しい実感でなくて何であらう。この実感は将来、時熟する「神の仕組」「経綸」の内実を予想しての上のものである。その「経綸」は、「三千年余りての」過去を内に含んでの将来実現さるべき「経綸」なのである。

大本の教義は、まさにその時間構造として「良の金神の世になりたぞよ」の初発の神示を時点として過去と未来の神のことがらを明確に開示している。しかもそれはともに一貫する「天地の誠一つの先祖」の「生神」の仕組として時間の連続とその内実をなす無限の歴史経過を示しているのである。はなはだ字義的ながら「良の金神」

の「良」が、訓読で「ハジメ」「カタメ」「トドメ」とも読まれることは、時間概念を、一字に表現しているまことに興味深い言葉であり、まさに歴史主体としての生神の名にふさわしいものと申すべきである。

さて、右の時点を、過去、未来の一線に接合する時間構造は、われわれに特定の意味と価値をもって迫ってくる。

時間が、単に形式的な時の連続としての時間としてではなく、「世界」と「人民」に意味と価値を賦与するものとして、生命と存在の有意義性をなして迫ってくる。それは意味を保有する事実をもってなる「歴史」として迫ってくる。歴史はまさに事実の裏付けがなくてはならないのである。世界は事として現われる、すなわち現象する事実でなければならぬ。現象するものは、すべて直ちに歴史と言えないが、その事の現われが、われわれに意味をもって迫るとき、それは歴史として生きている。一般に歴史はつねに現象した事実を、後から、これを整理し意味付けられている。すなわち過去性、既往性のものを、その対象と

し内容としている。しかもそれらは人間主体、人間中心的な視角から整序され意味付けがなされる。ここに宗教史観、とくにここでは大本史観と、まったく別異なものとして在ることを留意しなければならない。どのように既往または過去の事実を詳細に整序し探求し意味付けをしても、そこからは生ける神は生れてこない。人間的理想への指向と幻影は求めえても、生命として迫り、それから必然の事象が生起してはこない。創造の本義、とくに神の意思による創造の事実は現われてこない。まことに、一般の歴史観と大本史観とは、ぜんぜん次元と内容視角を異にしているのである。大本史観は、とはいえ、いっばんの歴史を無視するとか軽視するというのはない。むしろ重大な関心を持つてはいるが、ぜんぜんジャンルを異にしているというのである。では右の時間構造を如何に大本史観にまで形成しようというのであるか。

大本史観は単に大本という教団自体の史観ではない。教団の所在する日本という国の史観を意味してもいないし、また世界についての史観でもない。大本と日本を内

に含んでの世界に關しての「神の經綸」を、その實質とし内容としているのである。神が主体であり、主体である神の意思、しかも、世界に關しての神の意思が問題なのである。世界に關しての神の意思の時間的展開、整序すなわち神の經綸が問題なのであり、内容なのである。

大本の教義は、その根柢である御神論は、この事を明示し開示しているのである。前述の時点の關係から初期の御神示の一端にふれつつその内容を知ることにする。

初期の神論に、「からと日本の戦いがあるぞよ。このいくさ勝ち軍、神が蔭から、仕組がいたしてあるぞよ。

神が表に現れて、日本へ手柄いたさすぞよ。露國から始まりて、モウ一と戦があるぞよ。あとは世界の大大たかいで、これから段々判りてくるぞよ」「世界を一つに丸めて、一つの王で治めるぞよ。そこへなるまでには、なかなか骨が折れるなれど、三千年あまりの仕組であるから」「神が力を附けるから、大丈夫であるぞよ。世界の大峠を越すのは、神の申すように、素直にいたして、どんな苦勞もいたす人民でないと、世界の物事は成就い

たさんぞよ」。また明治二十六年の神論に、「お照しは一体、七王も八王も王が世界にあれば、この世に口舌が絶えんから」「一つの王で治める經綸がいたしてあるぞよ」

「世界の人民よ、改心いたされよ。元の昔に戻すぞよ」

「世界に大きな事や交りた事が出てくるのは皆この金神の渡る橋であるから世界の出来事を考えたら、神の仕組がわかりてきて、誠の改心ができるぞよ。世界には誠の者を神が借りておるから、だんだん結構が判りてくるぞよ」「一人なりと改心をさして世界を助けたい」「この神があつぱれ表面になりたら、世界を水晶の世にいたすのであるから、改心いたしたものから早くよくいたすぞよ」「これから世界中神國にいたして、世界の神も仏も人民も、勇んで暮らさすぞよ。神、仏事、人民などの世界中の洗濯いたして、この世を翻すぞよ」「も一つ世界の大洗濯をいたして、根本から世を立直すから、世界が一度に動くぞよ」「世界がウナルぞよ」「世界は上下に覆るぞよ」以上で充分であろう。ここでの問題に關する限り、この上詳述する必要はあるまい。その関心事を集

約すると次のように整理することができる。

一、神の仕組、経綸であること

二、世界に係わる神の経綸であること

三、世界の人民の救済に係わる神の意思であること

「神の仕組」「経綸」である限り、人工、人意によるものでないこと明らかである。如何に科学技術が進歩しそれを手段として理想の実現を企図しようと、それが根拠において人意、人工に出づるものである限り、ここでいう「神の経綸」とは言いえない。人間の発意にもとづくものでなく、もっぱら神意に根拠付けられたものでなければならぬということである。しかも、それはあくまでも世界全体を対象とするものであり、単に特定の国とか、社会とかをその対象としていない。

また、その経綸は「世界の人民を助ける」もの、救済を内容とするものでなければならぬ。一部の国家社会の救済を主眼とするものでないばかりでなく、その救済は、世界の人民の「改心」にかかわるものでなければならぬ。端的に神による救済でなくてはならない。

神の経綸の内容の一端について御神諭を見ると、「世の立替、立直し」とある。「世が変る」とのお示しもある。「世の持ち方」いうならば政治とか制度の改変が問題なのでもない。「戦争と天災」による立直しでさえもない。「今度は、一番に、靈魂界の」「立替であるから何につけても大望であるぞよ。これほど曇りきつておる三千世界の身魂を水晶の世にいたしてモウこの後は曇りのかからんように万古末代世を持ち行かねばならんからなかなか骨が折れる事」と神意のほどを明らかにし、しかもその経綸の内容と施行について、「天地の大神の思いと人民の思ひとは大きな違いであるぞよ」と、経綸の本義が人を越え世界を越えての神の事柄に属することを明示している。

明らかに大本の教義は、世界をその対象とし内容としその対象、内容である世界を、現状から神意によって、意図される状態の出現といった強い意思、それは神の経綸に相当するものであるが、かかる神自らの世界と人民のための意思実現にかかわる神示を内容としている。大

本の教義が示す神は、世界を「構う」神であり、「世界の人民」を救済する神である。世界をその意思によって「経綸」していく神である。世界とは神の意思の実現の場である。神を離れて世界もなく、世界を離れて神も考えられないといった神と世界の相即性の関係を見る。神の意思の実現がそのまま経綸であり、その現われとして世界の創造があるのである。そして神の意図される「神世」について次のような神示を見る。「時節まいりて煎豆にも花が咲きて上下にかえりて、万古末代つづく世になりて、神は厳しく人民はおだやかになるぞよ。これを誠の神世と申すぞよ。神世になれば人民の寿命も長くなるぞよ。世界中勇んで暮すようになるぞよ」。これに見るように、「神世」はこの地上のものであり、われわれに直接する世界である。

神の仕組、経綸は、したがって単に觀念やプランを意味しているものでなく、世界の場において、現実の事実となる神の意思の具現化である。神による、世界歴史の創造である。神も「時節に勝てない」とのお示しがあ

るように、神の意思の展開である経綸はまた、世界の客観状況に相即し、かつ迫られてもいるのである。明治二十九年十二月の神諭に「人民は世界が開けて、あまり結構になると、元の昔の活神の苦勞を忘れて、勝手氣儘になりて、全然世が頂上へ登りつめて、誠の神の思いを知りた人民はだんだんに無くなりて、利己主義の行方ばかり致して、この世を強い者勝ちの畜生原にしてしもうて神のおるところも無いようにいたしたから、モウこのままにして置いては、世界が潰れて、餓鬼と鬼との世になるから、立替をいたさなならんことに世が迫りてきたのであるぞよ」「神が表に現われて、神力を現わして、三千世界を日の出の守護といたして、世界を守るぞよ」とあり、その救済に關し「世界の人民が可哀相であるから何でも人民を助けたさに神が永らく艱難苦勞する」と神と世界との關係につき神の真意を明らかにされている。

かくて大本の教義は、その根本的視野において、つねに世界が中心でなければならない。その世界は、神の意志の具現として、その時間的配列と無限の中と広さと深

さもつ経過の整序の視角から観る時、それは自ずから大本史観を規定することになる。空間的場としての世界は時間的実質を得て、創造の生ける実質を形成していくものといふことができる。神の意思の実現をぬきに、または時間をぬきにして大本の教義は成り立ち得ないといふことになる。逆に言うなら大本の史観の肉付けとして世界が展開され、そこに人間存在がその本来性において様姿を具現し、自覚され把握されてくる。世界と人民が神の経綸にかかわる限りにおいて、いうならば、これに参加する限りにおいて神の世界が具現するといふことが出来よう。大本史観がその教義の根本から生まれ、内容の展開において在るというのはこの意味においてである。大本の教義は、したがって神の経綸において成立し、そしてその史観はここに存す。

神の経綸は、神の意思による世界の立替、立直しを内容としている。現実の世界を神の世、神国にすることを意図している。このことは上述の御神論の一片からも窺い知ることができるが、それはまた現実の世界が神の意

思に反し背いていることの矛盾の対応を意味しているとも解せられる。御神論にこの事を「利己主義の世」「獣の世」等と表現されている。明らかに、人意、人慾によって形成されている現在の世界、人間中心的な世界の客観的状況を表現し象徴している。さればこそ、神意による世界、神中心の世界に立替立直すことが、当然の意図にならなければならない。このことは、初発以来約三十年にわたつての、すべての神論の言々節句が詳細に開示し一としてこれに融れていないものはない。神と人、それはまた神と世界と同一であるが、神人関係をこのように現実的に具体的に明示する教義は、大本のそれを除いて他に見出し得ないと信ずる。それは、神の救いの大愛が如何に大きく、深く、広いかを示す以外の何ものでもない。

この救いの根拠と愛とに、確信をもって真実の神の出現を賭けるものである。神の経綸について、たとえ世と人との利己的主観的立場から受取る限り、あまりにも冷淡かつは悲惨でもあらうことも、その根本はまさに神の

大愛と救いとしての経綸なのである。それは焦点の差すなわち人間本位人間中心に観るか、神本位神中心に観るかによって、雲泥の差を生ぜしめているのである。「今度の仕組は人民では汲みとれんぞよ」「今度のことは智恵や学ではとうてい可ん」の御示しどおりである。そして世の切迫の実情に即応しての神の配慮について次の惻然たる神示をさえ見るのである。「世が迫りて来たからモウ何時立替が始まるか知れんから、後でデリ／＼悶えいたしても、モウ仕様が無いから、何時までも気を附けたが、モウ気の附けようが無いぞよ。日本の人民から改心をしてくださらんと世界の人民三分になるぞよ」。神の国の実現、そのための経綸は、かくてあまりにも厳しいものということができよう。いわゆる世の終末、大峠の神示の存在は、神示だけに、あまりにもその嚴肅さに神然とするものを感じる。世の終末といい、大峠というも、それらは何も大愛に反するものではないことに反省しなければならぬ。自らが、神に反し、忘れ、離れてゐるからこそ、しかり、人智、人欲、人力にあまりにも

執着し、高慢であるの故に、神は、世界と人民の本来性に鑑み、その在り方へねじ戻そうとするのである。原因事由は世界と人民の側に在るのである。原因事由の除去すなわち「改心」が何よりも先決問題でなければならぬ。神の経綸もそのためのものである。「改心いたして神心に立復りた人民には明日によく判る仕組であるぞよ」の御示し以外何を要しよう。「世を立替えて先の判る世にいたすから自己の心から發根と改心をなす」ことであり、かくすれば、「今度の役に立てるのは、水晶魂の選り抜きばかり、神がうつりて参るぞよ」。問題は、終末なり大峠の意味の理解と、これに処するわれわれ自身の問題でなければならぬ。神国の世の出現も救済も皆この「改心」「身魂磨き」にかかっているのである。「改心」「身魂磨き」の成就如何こそは終末にも大峠にも重大な結果を招来するのである。神の経綸の本質的目的はまさに、これにかかっているのである。

ここにおいて、あらためて初めに掲げた「三千世界一度に開く梅の花、艮の金神の世になりたぞよ」にもう一

度ふり返ってみよう。前述来によって明らかのように「良の金神の世になった」とは、世界の経綸主体と主権を直截に示しているのである。しかも「神の申したことは髪の毛の横巾も違いはない」との御示のように、今日に至るまで神示どおりに実現され具現されてきたのであったすでに開教七十周年を迎えようとしているが、その間すべてが、御示しどおり出現したことは、世界の事実であるだけに、疑うとして疑い得ない事実としての教義である。良の金神は、まさに世界の主権者であり、経綸主体であり、また、救済主体でもあることを、心して思うべきである。

この良の金神が、明治二十五年旧正月、自らの言葉として世界に発言され宣示されたものであった。かくてその時点こそ、世界的事件であり、またこれを中心として「昔」「元」の神世に遡り、これに対比してくるべき立替立直しを経て、生起すべき「神世」が浮き出されてくる。「元の昔の神世」があればこそ、歴史の始点が明らかとなり、また出現さるべき将来の「神国の世」「水晶の

世」「みろくの世」があればこそ、その終点が明らかとなる。そしてその焦点、接合点こそはまさに「良の金神」の御神言であり、かくてその御神言に根拠付けられて、歴史の始まりと終りが、すなわち歴史観が生まれてくるそして将来、神国の世出現に到るまで幾年また幾十年をえみするかは、われわれの知る限りではない。しかし御神諭が示す「神せける」の心情から思うのとき、それは遠い将来の問題であるとは考えられない。むしろ現実の世界の様相と大本の教義が教示するところから、その時期がまさに切迫していることだけは確かである。前述のようにその時期の何時なりやは、神のみこれを知り給うのであって、世界の経綸主体でないわれわれの論議の限りではないこともろんである。ただ、そこに時点を置き、しかも経綸および救済主体の御神言による既往と将来の世の在り方の本来的同一性を思うのとき「三千年あまりでの経綸」として大本の教義はあまりにも、はつきりとその歴史性と真実性を示すものと言うことができる。「時節には神は勝てない」と申されているとおり、

全世界の質と量において特定の時間配列、嚴肅な時間的経過と秩序の段階をなして、経綸は展開していく。そこに大本史観は存在理由を見出す。一般の歴史、歴史観とは全く次元と質において、また言うなら量においても異なるものあるを深く考えさせられる。

上述によって明らかのように、大本の史観は、また一面、大本教義にもとずく世界観を意味している。世界をどのように観るかを教えている。かくてその史観はまたその本質的意義において、教義の基盤に立つの眞理性と現実性の問題ともなる。世界は自ずからわれわれの生き方を教え導びき、その道を開示するものでなくてはならない。われわれの「生」そのものを構成し、意味付けているものでなくてはならない。人間本来の「性」としての「本性」が、現実の地盤の上に、悟りと実証において「證」または「証」となり、現実^{じつ}にわれわれの「生」を教^{しづ}え示すものでなくてはならない。眞理性と現実性が相即していることを保障するものでなければならない。このことの究明は大本の教理の根柢または基盤の認識へと

導く。すなわち、まず靈界の実在について、そして靈主体従、相応の理、靈界と現界の移写關係等々の理解へと深められていかなければならない。万物はみな靈的存在の現われであり、各自は各々靈界に籍をもつ。かくて靈籍を保有する限り、その本性は道を以てするなら、これが実証せられなければならない。御神論に、人間は神の「分靈^{わけたま}」であると教示されている。自らの身魂磨きにより何よりも、強い「信神」によって、実践を通してのことは証されることであろう。それはまた同じ腹から生れたもの、すなわち世界人類の同胞性、それ故にこそ、ともに愛と善をもってコミュニケーションしなくてはならない理も生れてくる。世界というも決して、自己から遠く離れてあるものではない。否、世界とわれわれは一体的でさえある。一体であるべきである。眞理性は、この世界に普遍の理、ローゴスを意味している。大本の教義はその本質において、まさに、この普遍の理、ローゴスとして存在しているのである、眞理として存在しているのである。しかもそれはローゴスとして存在するばかりでな

く現実に展開し、自らを開示するのである。上述に融れたように、神の経綸は、世界と人間について、事実の上で自己の真理を現実に実証しており、されてもきた。真理性は具現され、またされた。真理は訓読で、「真」「誠」ともにマコトと読まれる。「マコト」は真事であり神の事である。事、事柄の真理性は、神の事、事柄として、神との関係において絶対の根拠をなしている。したがって、神の経綸というもそれが神の創造する事、事柄である限りにおいて、正に真事^{まこと}であり、真理でなければならぬ。しかも事実として現象する限りにおいて、事の現われとして真理性と現実性は相即していなければならない。いうならば、事実と、それが包蔵する意味、価値とが相即するところに、換言すれば「性」が「証」をもつところに、完全な意味で具体的真理がただ在るといえよう。そして大本の教義は、まさにこの具体的真理を世界的中と深さと高さ広さにおいて開示しているのである。大本史観は、これを基盤として、生命の流れをなして流れているのである。われわれが真に信仰に徹してこ

の流れに合流しうるとき、いうなら大本史観がわれわれに生きて流れるのを実感されるとき、さらに言えば、神の経綸に参加する自己として神の意思に融れるとき、そこに自らの本性も自覚され、永遠の生命の歓喜に充足されもしてくるであろう。このとき、御神論に示される警告に類する教示は単にばらばらな将来の予言に過ぎないといった軽率な受取り方でなく、いわんや恐迫に類するものとしてでなく、世界と自己が神の大生命の展開の内において、その時間的段階の秩序における様相の中に生きていることを自覚されることであろう。それは事の現われ、創造として、大生命の自覚内容として、受肉する現実として受け取られるであろう。それこそ大本史観の具体的展開でなければならない。

かくて、大本の教義にもとづく世界観と大本史観の一体的自覚は、明治二十五年旧正月の良の金神の世になって以来、教義が教える「神の世」「みろくの世」は、各自の現在として生きていることを教える。「改心」「身魂磨き」「強い信仰」の実質を、自分のものとする限り

において、将来にまつまでもなく、すでに今にして、その者は「みろく」人であり「神世」の住人であることを証するであろう。それは、しかし、個人の存在仕方でありえても、それによって、世界は直ちに「みろくの世」「神国の世」であるということではないこと、もちろんである。ただ本人にとっては、すでに然りという意味である。神の経綸として展開されるであろう現実が、その者にとって如何に苦難、難事であろうとも、経綸と一体である限り、神とともに生きて在るが故に、今においてそこに、神国に住み、楽み、喜ぶを得るのである。単なる人間的配慮、世俗的視角から事柄を感じ、批判し、固定化してはならない。経綸の具現における神意の中に自得されるべきもので、これに参加せざる者、神意に合流せざる者の容喙する領域外のものと信ずる。

大本の教義は、かくて、その歴史的 성격と世界的性格との故に、ローゴスとして真理性と現実性をもたなければならぬとともに、これを持つものとして存在理由があるのである。したがって大本史観の現実化は、真理の

具体化、現象化、受肉化として生きていけると言うべきである。この意味で大本の教義は、世界の現実の事象と相關してのみ意味をもち、そこで神の意思に融れることができ、その意思の温みにおいて神御自身に融れうることが出来るということがいえよう。生ける神であればこそ創造主体として経綸の、そして歴史の主体として在る理である。これに参加する自らの自覚において瞬間即永遠の意義が生きて了解されるであろう。教義が教え、生み出す力、信仰の力は、世界普遍の理と、その実質をなす愛善の力となるであろう。その喜び、神と一体となる安心でもあろう。

大本史観は、したがって、単なる理念体としての觀念的形体ではないので、それが生命体として、その世界観とともに、現実生きて活らくものとして他の一般の歴史観とけわしく異って在る。その偉大な雄姿は、生きてわれわれに迫り、生命の息吹をはき立てる。しかし、留意さるべきは、大本史観はかくて、強い信仰に自ら生れる事柄、神の事柄に属するものというべきである。人間の

自己の意欲、知識、自力のみでは自覺され把握され得ない、信神の中に維神に贈与される言わば神の事柄といつても過言ぢやない。したがって、單なる觀念のお化でもなく、屍の如き理論でもない。この故に、一般の歴史史觀とは全く異なり、神につながり、かわる大本史觀は独自の性格と生命をもつ。一般史、史觀のように人工、

人欲のものばかりか、自己を越え神からの力が加わって始めて生まれるものである。これに反し一般史、史觀の場合は、その内容が人智、人工によるものである上に、あるいは神の意思に反し、または背くものであったり、場合によれば、惡魔的性質のものさえあり得るであろう。その限り、大本史觀とは対立、抗争の關係にさえ置かれることであろう。また一面、大本史觀は、單なる天国建設を夢見る、眞実体を手さぐる、史觀ではないのであつて、あくまで現実の地盤の上に築かれ生きた史觀であることは、上述来よりこの上説明に及ぶまいが、大本でいうところの「地上天国」の言葉どおり、宙に浮いた天国建設でなく、地上に天国を具現する神の具體的経綸を内

容としてゐる。一般の歴史、史觀からこのような神の事柄は、どこからも生れて來得ない。

それ故にこそ、現実の混沌、紛擾の世界の中に、われわれが如何に生き、何をなすべきかを明示することができるものとして、神からの指標として大本史觀の重みがあると信ずる。それはまさに大本信仰に生きる者にとつて無上、無類の神からの贈与の賜物である。

時間の中に、巾、広さ、深さ、高さをもつて、その内実をなしている御神論と靈界物語が流れている場こそが大本史觀の眞実体なのである。それは一面、眞理（ローグス）の展開として幾多の論理的契機を包蔵し、その一つ一つにさえ重要な論理的課題を見出すことができる。もちろん、それをよく知る者ではあるが、ここでは、もっぱら大本史觀の眞実体を纏った一者として、これに対してしながら、冒頭にも融れたように、その素描を述べて見たのではあつたが、はたしてその高貴性の一端でも香い出しえたであらうか。

みろくの世に就いて

鈴 木 祥 雄

仏教の法滅尽経には、末法の世の

終りに、弥勒菩薩が出現して、極楽浄土を成就する次第がでており、基督教の聖書には、世の終りが来て救世主の再臨により、地上に天国が実現することが予言されている。大本でいわれているところの「みろくの世の実現」は、これらの仏經、神約のそれであって、これが、大本神業の一大目標であると思う。

わたしはこの「みろくの世」について、大本神示にもとづき一応の管

見を記したいと思う。

よって、解明の内容を ㊦みろくの世の真相 ㊦みろくの世の二つの見方 ㊦みろくの世はいつ実現するか ㊦みろくの世の実現に対する心構え等について述べてみたい。

みろくの世の真相

○その範囲

「三千世界の大洗濯大掃除を致して天下泰平に世を治めて万古末代続く神国の世に致すぞよ」(明治

二五、旧正月の神諭)

「現幽神の三千世界を清むるは吾大本の大使命なり」(出口聖師の神歌)

「五六七成就の御用に尽す……とあるは大神より地獄道に陥れる此の現界をして天国浄土の楽土となし一人も地獄界に墮^おさざらしめむが為である。要するに靈界現界を問はず地獄なるものを一切亡ぼしその痕跡をも留めざらしめむと計らせ給ふ仁慈の大御心より出でさ

せ給うたのである。(靈界物語五

二卷)

以上によつて見るも、みろくの世は宇宙一切を光明化する一大神業であるといえる。

○内容の真相

(イ)世界は一つになる

「お照しは一体、世界一つになる経綸がいたしてあるぞよ……」

(ロ)上も下もよくなる

「これまでの世の持ち方は後先構わん利己主義の行方であるから強いもの勝ちで弱いものは路頭に立ちたぞよ。上ばかり宜くても下が立たねば、この世は治まらんから上下揃うて勇む神国の世に致して御先祖様に御渡し申すぞよ。(大正六、旧九、三〇)

(ハ)靈魂とやり方を替える

「惡の靈魂を善へ立替えて此の世一切の経綸策をノリ(神法)かえて新つの世の純粹の元の神國魂にして了うのである……」

(ニ)一切を替える

「何もかも一さい万事あらたまると宣らせたまひし開祖かしこし」

「大本は政治經濟宗教や教育の根本立直す道」

(ホ)即賞即罰の世

「善い事をすれば善くなり悪い事をすれば悪くなる世を称してミロクの世というのである」

(ヘ)氣候がよくなる

「お筆先にもみろくの世が来たら陽氣までも変る」と御示になつてある……陽氣までが次第に調ひ

つつあるのである、ドエライ寒い処や、暑い処は、だん／＼なくなる」(玉鏡二一七)

「木の花咲や姫神の天地和合の御宇護で弥々明き彦火々出見の神の御言の世となれば五日の風や十日の雨も揃うて賑はしく……治まる御代の目出度さ……」(大正、一八)

(ト)其の他

「惟神の大道を実行したまふ時代(即ちみろくの世)には國に天災地變なく人畜に病災なく政争跡を絶ち戦乱起らず人に盜欲の心なく生活に困難を來たさず社会的の不平もなく……男女老幼共に各自天賦の靈能を發揮して人生の天職を全うし各々天賦の幸福を樂みて天

國の生活を為すに至らば是れ惟神の道實現の神世なり天之岩戸開きなり五六七大神の出現の世なり」

(全集第一卷五七頁)

以上の御神示を基準としてみろくの世の真相はさらに広く深く探究されうるのである。

みろくの世の二つの見方

みろくの世の見方には、二様が考えられる。

その一つは「みろくの世は、すでに來ている」という見方である。二は「みろくの世は近づいてはいるが實現していない」という二つであるが、その二つの見方が混線すると分明を欠く。

わたくしは、一を「局所的みろく

の世」、二を「全体的みろくの世」と仮稱して説明してみる。

局所的みろくの世

(イ)みろくの世は明治三十年から

「弥勒といふ中には法身、応身、報身と三つに分れて居るのである……開祖は明治二十五年に現れ給うたのであります。……いよいよ法身弥勒の御働きをされたのが明治三十年からの事で……明治三十年から弥勒の世になつて

いるのであります。……物質文明が益々發達して……天地間というものは非常に縮小して居ます。

……交通機関が既に統一されて居るのであります。……こうして余す所は唯精神界の統一が残つ

ている丈である。」(全集第二卷五一頁)

みろくの世を物質的に見ると、世は既にみろくの世に接近していると思われる。

一面、精神的に見ても、その人、その人によっては、すでに、みろくの世に住していると見ることができ

る。

「末の世と人はなげけど道を行くわれには五六七の神代なりけり」

(愛善の道、八八頁)

「罪に沈みし人の子は声を放ちてさわぐとも、神の大道をあゆむ身は、いかでおそれむ惟神、嚴の御魂や瑞御魂、清めの神のます上は」(大本讃美歌第五)

地獄相の中にあえいでいる世相の

中にも、光明に輝やく天國の生活を営んでいる人々もあるわけである。

これを、國際的に眼を転じてみる

と、長い間、横暴を極めた強國の圧勢下に苦悩を續けて來た植民地がすでに十數力國も獨立を宣しているではないか。フルシチ ョフ首相をして

たとえ、外交辭令にもせよ軍備徹廢を提唱せしむるに至った事は、如何に全世界の人々が絶對平和時代を待望しているかを物語るもので、ほのぼのとみるくの世の曙光がまたたき始めていることを見逃してはならぬこれ「立替の中に立直しがある」と神示された所以であると思う。

出口聖師が、大東亞戰に敗れたことについて、終戰の約一ヶ年半年前に「昭和二十年葉月（八月）半、世界

平和の結につく」と喝破されたことに一つの暗示が潜んでいると思う。

全体的みるくの世

前記の如く部分的みるくの世はすでに來ているが、全体的みるくの世はまだ實現しておらぬことになる。天災あり人災あり、世は苦惱の中に呻吟している。

すなわち明治三十年から開祖様が法身みるくの御働きをなされ、次いで出口聖師が応身みるくの御働きになられても、みるくの世は完成はしておらぬ。

「ミロクの世と謂えば天下泰平、至善至美なる安心な世、鼓腹擊壤の世の中のように思っている人が多いが併し是が報身のミロクの世の中とならなければそうはならぬ

のである。夫迄はミロク様は応身と現はれ總ての世の惡魔と戰はなければならぬ。」（全集第二卷五一頁以降）

三代様が教主御就任當時の御歌に「吾祖母の予言たがはぬ世の相を思へば五六七の世は近からん」とあり大本讃美歌の各所にも「五六七の御代は近づきぬ」と示されている。近づいてはいるが、完成はされておらぬのである。

みるくの世は、いつ實現するか

「法身の弥勒は既に天に昇りて若姫君の守護致すなり応身の弥勒は地に降りて泥に交はり、あらゆる艱難苦勞をなめ世界の為に千座の置戸を負いつつ千挫不倒百折不撓の金剛力

を發揮しつつ地の一方に現われて神界経綸の大漠を遂行しつつあれども世俗のこれを知るものは無く常暗の夜の今の有様、今に夜が明けるとビツクリいたしてアンナものがコンナものに成ったのかと申して世界の人民が舌を捲くように成る仕組であるぞよ。応身の弥勒の子には報身の弥勒が出現して水晶世界を建設し宇宙万有一切安息致す時は、それが弥勒三会の暁であるぞよ。世の中の総ての事を神直日、大直日に見直し聞直し詔り直す大直日の大神の光り輝く神の御代となるぞよ」(大八、七、二三)

報身みろく様は三代様であることは申すまでもないから三代様の御代にみろくの神の御代を成就される経綸とみられる。

「木の花咲耶姫神の天地和合の御守護で弥々明かき彦火々出見の神の御言の世と成れば五日の風や十日の雨も揃ひて賑はしく人の心も清滝の水の流れも美はしく治まる御代の目出度さは我が神国に天照り徹り、助け幸い生国と上下揃うて梅の花、一度に開く楽もしき、永き神代を松が枝に月冴え渡り天津日の、世界一つに治まりて天津日嗣の御稜威を仰ぎ敬ひ歎びつ、丹波路の綾の高天に参集ふ、神の経綸ぞ尊けれ」(大正八、一、一)

御神論中の木の花咲耶姫神は三代様、彦火々出見の神は日出磨様とみる時に、みろくの世の実現は自ら然然とする。

「身と魂と一致して神業を完成

するものは三代の御用」(神霊界大正一〇、二月号六一頁)

神業の完成とは、みろくの世の実現を意味することは明瞭である。

二代様の御言葉にも「三代が揃うたなればみろくの世と成り、うれしうれしの木の花の咲く如くなると開祖様は申された」(木の花誌昭和二年六月号二二頁)とある。

三代様が大祭毎の御挨拶にみるもいかに、みろくの世の実現を念じられ、待望され、そして大神様に祈られつつ、教主の御立場において責任を感じておられるかを思う。

実現に対する心構え

御神業の目標たる「みろくの世」の実現！世にこれにすぐる雄大な

る光明があろうか、かかる大光明を前途に望む時、活氣と感激は自ら溢れてくるはずである。これを待望することは当然である。そこに信仰が燃えてくる。

けれどもここに一步を誤ると大変な事になる。それは「秋には増産がある」といって仕事もせずに待っているようなことである。いたずらにソロバンだけをはじいている人には地獄の訪れがあるのみである。三代様は「みろくの世を棚ボタ式に希んではいけない。人間らしい温い心の上に、おしぐみの立替立直しを真剣に行じて行くべきである」と強く戒められていることを忘れてはならない。

報身の弥勒の世が成るまでには、

「一つの大峠があります。この大峠を越さねばならない」と示され、しかも「大峠は金銀では越せぬ、神徳でなければ越せぬ」と戒しめられている以上、みろくの世を棚ボタ式にいたずらに待っているわけにはいかない。

ここに三代様の御言葉を記し、みろくの世を待ち望む私共の心構えとしたい。

三十三年みろく大祭における御挨拶に、

「確乎不動の信仰が行に現れてこそやがてみろくの代が来るものと信じます。みろくの代の実現は私達の自覚と実行による外ありません」

三十四年みろく大祭の御挨拶に、

「真の和合と身の行いを正す事こそ

第一である……」

更に昨年十一月二日の大本開祖大祭における御挨拶に、

「祈りこそ唯一の救いであり神様と人の心が通ひ合う道で御座います……私たちの常々の祈りも荒れ狂う嵐の中における祈りのように真剣でありますとき、はじめて開祖の御精神に生きることが出来て私たちの家庭や、また広く社会や世界の災害や不幸を最小限に止める力となり、感謝と希望と勇気を起させる源となりました、神様の願われますミロクの世へ近づいてゆくことを信じるので御座います。皆さまと共に、真剣な祈りに徹するようはげましていただき度いと念じております」

(おわり)

世界・日本・大本

成瀬 邦 男

アメリカの日本研究

明治三十一年七月十六日のお筆先に「世界にはだんだんと不思議があるから、人民よ、世界をみて改心を

いたさぬと、神のあるか、ないかを解けてみせるのであるから、その心がないと、神もこらえ袋がきれるぞよ。神は世界をたすけたさに、人民のしらぬ苦勞をいたしておるぞよ」とあります。また、今年の「おほもと」誌の新年号に「自己を正しつつ世界とともに」という題で、三代教

主が「世界の安危と、私たちの安危とは、いまでは一つものであるということに、もう、うかつであつてはならないと思います」とお示しになっておられます。

その御教示にしたがつて、世界の移りゆく姿を見てみると、二十世紀になってから、日本という小さな國が、西欧諸國の注意を集めはじめていることに気がつきます。

バーナード・ショウ、クロード・デュアメル、そのほか多くの大作家たちが、日本印象記を書いたし、ま

た裕福なツーリストも、好んで日本を訪れました。ゲイシャ・ガールやフジヤマやサムライに象徴されてきた日本がにわかに、すばらしい文化を持っている國として見られるようになりました。中国や西洋のもののサル真似しか出来ないと思われた國が、独自性に富む國として西洋人を感心させています。

なかでも日本に関心をよせているのはアメリカだといわれています。

全米で五つか六つの大学に極東学部があり、熱心な学生たちが日本学を

勉強していると伝えられます。こんな機運はいったいどうして生まれたのであろうかという、じつに不思議なことですが、第二次世界大戦がその惨禍のあとに残した美しい贈り物の一つであったということです。

戦争が貿易とならんで、民族を混合させ文化を統合させる原動力となるということはよくいわれることです。米国は第二次世界大戦から外交上でも孤立主義を完全に脱却し、文化の上では建国以来もちつづけた西欧文明の伝統の上に、新たに日本文化の伝統に直接に、しかも密接に接触することになりました。

ギリシャ・ローマに起源を發する西欧のヒューマニズムだけが人類の唯一の文明の源泉ではなく、これを

抜きん出るアジアの文明の源泉が存在します。ギリシャ・ローマのヒューマニズムがヒューマニズムの唯一の形態ではなく、日本・中国・インドが別の形のヒューマニズムを開花させています。ヒューマニズムを單に西欧の古典を通じて学ぶだけでは足りない、日本・中国・インドの古典を通じて大いに学ぼう。米国の大學生が東洋古典を学ぶのはこのような機運を背景とするものです。

ソ連の日本研究

ソ連は日本を隣人だといっています。ソ連の作家イリヤ・エレンブルグが昭和三十二年四月に日本へ来たとき新潟で地図を見せられ、ソ同盟とは目と鼻のすぐ近いところにいること

を知って驚きました。両國人は隣人だということです。そのイリヤ・エレンブルグが東京の博物館で、七世紀の彫刻に魅せられたように立ちすくみました。七世紀という時代は「西方文化」の独占的なにない手だ、といま考えている人々の先祖が、森林のなかで原始的な生活をいとなんでいた頃なのです。

この数年間にソ連では、日本の古い詩と現代詩をあつめた詩集が出版されました。啄木の詩も、徳富蘆花、夏目漱石、島崎藤村の小説、それに木下順二の戯曲もでした。井原西鶴の小説も翻訳されています。もともと庄巻なのは昭和三十三年七月にソ連で万葉集のロシア語訳が完成したことです。欧州の言葉に万葉集が

全訳された最初のものとなりました

その他の地域にも

米国の「日本ブーム」がいま花盛りならオーストラリアのそれはふくらみ始めたツボミであります。「過去は過去だ。日本とオーストラリアはアジアの友としてしっかり手を握っていかう」と握手を求めてくる元オーストラリア軍人。「日本のカメラは西欧以上ですよ。私も買いたいのですがすぐ売切れるし、日本のメーカーの名を教えて下さい」という青年。

「優雅さを、つつましさを身につけるため娘に日本のお花を習わせることにしました」とほえんで語る主婦。そしてこのわき上がるブーム

にのって某有力政治家はこういいます。「オーストラリアは日本の産業投資を待っている。われわれは日本の投資家に最大の西欧並の便宜を提供しよう」

この「日本ブーム」の原因は何か？ 世界的日本ブームの余波だといつてしまえばそれまでだが、オーストラリアの場合はちょっと事情が違ふようです。

一般のオーストラリア人はきわめて「ドライ」です。彼らの日常の関心はただ一つ、つまり現在の高い生活水準をどうしてより高くして生活をエンジョイするかです。このオーストラリア人の心理に強く食い込んだのが三十四年シドニーとメルボルンで開かれた日本見本市。潜在的な

対日感情の好転がついに「臨界量」に達し、こうして「日本ブームの連鎖反応」が始まりました。

アジアの中のニッポン

東南アジアでは指導層や知識階級は日本で考えられている以上に、日本に対する関心が強くなっているようです。新聞などでも日本にかんずる記事はよく掲載されているし、とくに経済関係の記事などは日本ではあまり大きく扱われないものが、びっくりするほど大々的に報道されているようです。

一度でも戦後の日本を訪れた東南亜の人々は、例外なしにこちらがはずかしくなるほど日本をほめています。日本を先進国として高く評価し

「自分たちと同じアジア人の国なのだ」と日本の存在を誇りにしています。

あるシンガポールの華商は戦争時代のにが経験から日本人を恐ろしい国民という感じをもっていて、どんなにもうかつて日本製品だけは取引しなかったが、渡米の途中、日本に立ち寄ってからは、日本人を見直しました。日本とアジアとの関係については、特に出口聖師は次のように示されています。

『世界平和を招来する段階としてまずアジアの統一という段階を通らなければならぬ。アジア諸国は日本にたよろうとしている。しかし日本の今の当局者に、そこまでの雅量がないし勇気がない。欧米諸国には

ばかっている。こういうような弱気があるからいけない。いよいよの時には神が働くという考えと、日本というものの成り立ちを知った国民がそろったならば、外交も強くなるしまた、すべてのことが、うまくいくようになる。神を知ることが大事である。今の当局に神を知った者がいないから、思い切ったことがやれない。アジアには多くの人種が住んでいるが、人種の連合というものは、日本が更生すればひとりである。光は東方よりだから、火をとぼしておけば、アジアだけでなく、外国も寄ってくる。何もかも一時になって来るとお筆先に書いてある。アジアという元が統一すれば、みんな統一できる。』

というのです。

日本政府として手軽にできるPRは、まず文化映画ですが、日本政府は、この点ほとんど無関心のように出先の日本大使館では「もっといい十六ミリフィルムを数多く送ってほしい」といっています。現在、日本の姿を知ってもらうPRをする文化センターは、タイ国バンコックに一つ設けてあります。

タイ国には大本から昭和十年以前に宣伝使が派遣されていて、宗教的に密接なつながりができていて、神縁も深いものがある所です。

タイ人は、もともと日本人に対して友好的であったが、とくにこのごろタイ人の間の日本の人気は大したもので、日本の歌曲が非常にもては

やされ、日本の歌でさえあれば、彼らはなんでも喜んで耳を傾けるようです。タイ語訳の「荒城の月」ができていて、青少年の間で愛唱されています。それから芝居、戯曲も大變なうけかたで、大学の演劇部が、きそって日本物を上演し、近ごろはテレビが日本演劇を盛んにやりはじめました。

日本大使館では、このほど「巡回映画自動車」を購入しています。この自動車は文化にめぐまれないタイ国の田舎へ、日本の文化映画を持っていって見せるという趣向です。電気のない片田舎へも行くので、発電機も積みこんでいます。この巡回映画は、なかなかの人気で、毎回千人以上の観衆を集めているそうです。

イスラエルの日本美術館

イスラエルのハイファ市には日本美術館が建てられています。

この美術館は、オランダ在住のユダヤ人チコチン氏の発意によるもので、氏は三十年來、日本とヨーロッパで日本美術品を収集して來た特殊な人であります。

その美術館藏品の内容は足利時代の水墨画をはじめとする絵画、浮世絵、マキ（蒔）絵、陶器、民芸品など各部門にわたり、美術館は倉庫、事務室、図書室などに使う三階建てのビルと陳列館（幅十四メートル、長さ二十六メートル）の二むねでできています。

ブームは美的生活のみ

目下のところ、この日本ブームは美的生活に關することであつて、政治経済的なものではないということです。最近のアメリカ新聞にしても、伊勢湾台風のとき以外は、日本のことはあまり出ていないといひます。

つまり日本ブームということが言われるのは、根本において西洋文明の行き詰りからきていると思われまふ。だから外国人たとえばフランス人が、日本のカブキをみ、能楽を見ていいところをとりいれて、自分の何かに資する、プラスにする。たとえば、セザンヌやゴッホが浮世絵から學んで、日本人がそれを使えないほどよく使っています。

彼らは西欧化された現代の日本に對してはほとんど無関心で、関心の対象になるのは、いつも明治維新以前の日本文化です。禪、茶、生花、浮世絵についての本が、そうとう本屋にならべられているのをみてもそれがわかります。

彼らにとって日本は二千年の伝統と異質の東洋文化で、現代文明の圧迫を忘れさせてくれる解毒剤になっているのです。

昨年八月に來日したドイツの哲學者オットー・フリードリッヒ・ボルノウ氏は、日本の印象を次のように語っています。

伝統に強く刻印づけられている人間、そういう人間に私はいつも魅了されてきた。そして私は、この短い

期間の許すかぎり、この古い日本の過去に浸透していくことを念じた。その私にとっては、京都と奈良は、日本滞在の頂点であった。そしてもし私が、溶けあつた統一的な全体の中から、あえて三つの、もっとも強い体験をひき出すとすれば——そのことはただ芸術的抽象においてのみ可能だが——。

と前置きして、三つの印象をあげていますが、その中の一つをこういっています。それは、京都でみた「能」であつた。この演劇芸術のうちに表現されているその形ジ（面）上学的な深さは、私を驚かenseしめた何か——ただ例えとしてだが——生命から解脱してゆくおきなを、一種の舞踏の型で表現しているその演出

における沈重な明澄さは、私の生涯でかつて一度も打たれたことのないほど感動的なものだった。そして私は、演劇としてこういう深さに到達しうる民族を、驚嘆せざるをえなかった。——と述べ、さらにつづけてもちろん、私は近代日本、その工業的な発展、その経済的なエネルギーその驚くべき科学的な成果を見た。そしてもし、それらの面に目を閉じるなら、それは誤まれるロマンチックというべきであり、これら近代的なものの両面をあわせて初めて日本全体を現わしうるものだと思つてゐる。しかしまだ、この統合が達せられていないということは、明白なところであり、私はこの近代生活と古代文化との正しい均衡への可能性

を、おののき危ぶまざるをえないのである。この問題は、われわれドイツにも、まことに類似したものが存しているのであるが。しかし私は確信する——もしも、日本で遺憾ながらこの古い文化の伝承の成果がみられない暁は、それこそ日本ばかりでなく、人類全体がはかり知れない損害をこうむることになるであらう。と述べています。

日出磨先生のお示しの中に次のようなのがあります。

真に世界一家の日が来なくては世上に平和も幸福もありえない。一家にも家長がなくては統制がとれないのと同様に、世界にも必ずや宗主国がでなければならぬ。その宗主国としては日本がもっとも妥当であ

る。その理由としては、

一、東西のあらゆる精神文化と物質文化とを採り入れ、これをよく消化し、渾然として統一した民族は他にない。

二、わずかに八十年間にあれだけの物質文化を急激に吸収することが出来たのは、まったく日本人の素質、頭脳が非常に優秀であることを証明している。

三、忠誠心、廉潔、義勇、感恩、清潔の魂がまだ失われていないことが世界の指導精神である。

四、国土が優秀であること。

イ、景色がよい。

ロ、寒、暖、熱の各三帯を含んで山、湖、河、野というあらゆる見本があり、産物があること。

五、絶好の位置を占めていること。

西に欧州アジア大陸を擁し、東に両米を控えている。

と、使命の重大さが痛感されます昨年暮れに来日したフランスの文化使節ジョリベ氏は「日本の音楽には『救い』がある。つまり日本古来の多くのすぐれた音楽がある」といっております。

出口聖師のお示しに、

日本をヒノモトというのは、霊（ヒ）の本の意味なのだ。霊の字は和訓ではヒという。それに対して外国のことはカラの国といい、体である日本の国土と世界を比較して日本の国は小さい、人口も少ない。物質的に見れば、日本は世界の中の小さな一存在にすぎない。しかしこれを神

靈界から見れば全世界に拡大する偉大性を持っている。

今日までに日本は東西古今の一切の文明を吸収してきた。そのために多くの犠牲を払ったことは史実の示すところである。しかしそれは日本という世界の心臓が汚れた血液を浄化して、再び全身に送り出して四肢五体を養っているようにたゆまず屈せずの苦闘は日本の使命なのである。今日、日本の状態は、あまりにも汚ない血液を浄化しようとする心臓の力闘そのままの状態ではあるが、これが立派な血液に仕上げられた腕には、この漂える世界を救うことは決して難しい問題ではない。

とあります。

日本文化と大本

ボルノウ氏がいうように、もしも日本の古い文化の伝承の成果がみられないとすれば、まことに遺憾なことといわなければなりません。しかし幸いなことに、日本の近代生活と古代文化との正しい均衡への可能性を幾人かの青い眼の文化人は勇敢に発見しつつあります。

浮世絵研究家の金子要永氏を訪れた二人の外国の女性、一人は日本タームスのエリゼ・グリリ女史、一人は学習院教授B・リヴィングストン女史です。両女史はそこで見せられた一つの茶盃に対して、

『スバラシイ作品ガアリマスネ。

コノ茶ワンヲ作ッタ人ハキツト大キ

ナ精神ノ人デショウ。タトエバ人類精神ヲ考エルヨウナ頭脳ヲモッタ、ソウイウ世界的ナ大キナ人ノ作品デスヨ、コレハ』

これが両女史の一致した批評でした。そこで金子氏はもう一つの茶盃を二人の前にさし出しました。

『これはどうですか』

と二人は、かわるがわるその茶盃を抱えるように手にとり交わしていました。

『コノ茶ワンハ、マコトニシズカナ、ツツマシヤカナ典型的ナ日本婦人ノオ作デス。作者ハキツトソウイウ立派ナ方デス』

最初の茶盃は出口聖師の作られた耀盃と呼ばれる茶盃であり、後のものは三代教主の作られたお茶盃であ

りました。一個の作品を通じて、作者の人柄、内面的精神にまでふれたこれらの批評に、作者を知る金子氏は驚かされ、その審美眼に敬服したのでした。

間もなく大本の聖地である綾部、亀岡を訪れた両女史は、その印象を次のように述べています。

私が三代様や信者さんについて学んだことは、印刷物を読んでかき集めたものではありません。何故なら私の日本語の知識はまだまだ不完全で幼稚なものですから。百聞は一見にしかずということがあります。道場、神苑、植物園、宝座、広大な殿堂などを見ればよく納得がいきます。そうして、三代様は御自身の姿を通して教えを垂れる方であります。

私は三代様を、世界に対し、たましいのお告げをされる方としておしい申し上げるようになりました。と現在教団の中心の人の芸術作品が立派であるのは、期せずして誤りのない事情を物語っています。ここには他の教団のもつことの出来ない点での生きた内容が盛り上げられていきます。そうして、もっとも進歩的で近代に生きていることは当然な事実としなければなりません。

日出磨先生は、

古代日本の思想や文化の程度は、その時代時代の世界の文化よりは進んでいた。そしてまた種々の思想や宗教や文化が移入されているが、すべての物を抱擁して消化し、日本化し外来の思想や宗教や文化が、全然陶

汰訂正されて、日本思想となり、日本文化となつて完全に発達を遂げ、大本運動となつて現われたのであるといわれています。

現代のように世界全体が世界全体に影響し合つて、動いている時代はかつてなかったのであります。その時に乗じてちょうど大本運動が現われたということは、「時」の上から考えて、仏教、キリスト教、マホメット教以上の世界的な大きな意義があるということがわかるのであります。そしてまた、ここに大本の出現は神意によつていゝものであるということがわかるのであります。

それから「処」という点から考えてみましても、大本は現在外国の諸宗教と手をつなぎ合流して、外人の

信仰者を得て支部さえも設置し、一方海外に宣伝使を派遣して世界の人々に働きかけております。とにかく大本運動は「処」という点から考えましても、まったく世界的なものであります。

比較的短時日のうちに世界的になったということは、やはり大本出現にあたって「時」の利をえたからであります。大本が「時」と「処」を、よくかちえたというのは、人間がしたというよりは、やはり大本に神意があり、神様がしていられるものであるということを明かにしているのであります。

俗に時処位ということをよくいいますが、その「位置」という点より大本をみましても、日本という国に

大本が現われた事実、それがすでに世界的な深い意義をもっているのがあります。なぜかと申しますと、日本の一番尊いところは魂の国であるという事実であります。

日本をもつともよく理解し、日本のためをはかりそしてまた同時に全世界のためにつくしている大本運動が、日本の宗教的な方面（いうまでもなく宗教は最高精神でありますから、世界を愛善化すべき使命を持つ大本が宗教方面から現われるのは当然であります）から現われたということは「位置」の上において、すでに必然的な意義をもっているということがわかるのであります。

なおまた「人」においても、大本には世界的な意義があるのであります。

す。大本には陰、陽二人の教祖があるということは、宇宙的、世界的意義があるといえるのであります。その二人の教祖をおして出された「教」についてもまた世界的教えであるということが言いうるのであります。つまり大本運動は、「時」と「処」と「位置」と「人」と「教」において完全に世界的意義をもっているのであります。

だからこそ、陸統として、世界の文化の根源を求めて、その救いの恩恵にあずかろうとする人々が、世界の各地から日本を訪れ、その日本を訪れた人々の中の幾人かは大本を訪れて、宇宙精神の源流を汲み取ろうとするのでありましょう。（了）

〔昨年十月一日同志社大学教授、竜谷大学講師の神学博士土居真俊氏が大本本部を訪れて、出口伊佐男氏と宗教問題について懇談されたが、昨年十二月五日号の「和解」誌上に「恵みの賜もの」と題する同氏の一文が掲載せられた。この中に書かれた「カリスマ」の問題は既成宗教にとっても新興宗教にとっても、きわめて重要な点にふれていると思うので、特に同氏の御承諾を得てここに転載した。

(編集)

恵みの賜もの

土居 真俊

新興宗教

わたくしは、終戦後数年間、連合軍総司令部の宗教顧問として、キリスト教以外の諸宗教の調査研究に当たったことがあり

ますが、今また教団宣教研究の依頼によつて、いわゆる新興宗教の研究を始めております。去る九月の初旬には、岡山教会を応援されていたのを機会に、黒住教と金光教の本部を訪問して、両教団の教主並に最高幹部の方々と懇談し、十月一日には亀岡の大本本部を訪れて、その幹部の方々と話し合いました。殊に大本教の名誉総長、人類愛善会名誉会長出口伊佐男氏はわたくしと同郷同窓でもあるので、胸襟を開いて語り合うことができました。わたくしの諸宗教訪問はなお続くわけですが、これらの諸宗教を観察して特に気付く点は、そのいづれの場合にも教主が何か不思議な霊の賜ものをもっていると信じられており、その信仰が教主を中心とする教団全体に統一と活気を与えているということであり、これを宗教学上「カリスマ」と呼んでおり

ます。そして、カリマスは何時の場合にも人間の精神を健康にするというわけではなく、ある種のカリスマは人間の精神を圧迫し歪曲せしめるということもあるのですが、今はそのカリスマの質の問題にはふれないとして、ともかく、これらの教団の中に一種のカリスマが活きて働いているという事実だけは認めないわけにはいきません。

カリスマの喪失

しかし、こういったカリスマの所有者は、宗教家だけに限られているのではありません。昔は偉業を為し遂げた君主、軍人、芸術家、医者などもカリスマをもつと考えられておりました。ドイツの有名な社会学者マックス・ウェバーは、カリスマは天与の賜ものであるから、カリスマの指導者は訓練によつて養成することができない、したがって、それは職業

化され得ない、と申しております。しかし、ウェバーは徹底した合理主義者でありましたから、そういうカリスマ的指導者たちは社会の合理化が進むと共に、次第に、合理的に訓練された指導者たちによって駆逐される、と言っております。

このウェバーの言う合理化の傾向は、宗教の世界では、(一)霊の賜ものよりも教育や訓練が重要視される、(二)宗教が制度化され、職業化される、(三)祈禱が尊重され、(四)霊の賜ものが人間の能力によって置き換えられる、というような事実の中に見受けられます。

わたくしは神学教育に携わる者として宗教生活における教育や訓練の重要性については充分承知している積りであります。また、日本の宗教界には、もっともっと、合理化されなければならない多くのもののあることを知っています。しかし、宗教の世界では、合理化され得るも

のと、合理化され得ないものとがあります。そして、この合理化され得ない要素こそ宗教にとっては生命的であるのです。この点がよく認識されていないと、伝導の技術が進歩し、組織や運動が合理化されればされるほど、何か大切なものが見失われ、たゞ人間の作った機構だけが忙しく回転している、ということにならないとも限りません。これがカリスマの喪失にはかならないのです。

歴史的回顧

新約聖書の時代は、カリスマが力強く働いていた時代でありました。イエス・キリスト御自身が強烈なカリスマの所有者であられ、その御衣のふさにさわっただけで永年の病気がいやされたと記されております(マタイによる福音書九・二〇——二二)。また、使徒たちは言うにおよばず、信者一人一人が、それぞれ、

あるいは予言する力、あるいは奉仕する力、あるいは病をいやす力を賜わっていたということがあります(ローマ人への手紙一二・六以下、ペテロの第一手紙四・一〇等)。

ところが中世末期になりますと、このカリスマが制度化され、一定の手続きを経て按手礼を受けた僧侶は、その信仰、人徳の如何にかかわらず、カリスマを取得し、一生それを失うことがないとなっていました。宗教改革者ルターはこのように制度化されたカリスマに反対して、恩寵は、われわれの所有物とはならないものであって、それは神がわたくしたちを好意をもって取扱いたもうことだと教えました。しかし、ルターは一切のカリスマを否定したのではなくそれを聖霊の働きとして受取っていたのです。ところが後に神秘主義は聖霊の働きを「内なる光」と解釈し、合理主義は更にそれを「理性

の光一によって置き換えましたので、遂に現代の多くの人々には靈の賜ものということがよくわからなくなったのです。

カリスマの回復

それでこれらの教界にとって、最も重要な問題はカリスマの回復ということではないかと思うのです。しかし、現代の

わたくしたちが必要とするカリスマは、制度化され、權威主義化されて、わたくしたちの人格を圧迫したり、歪曲したりするようなものであってはなりません。したがって、それは理性に反するものではなく、むしろ、理性を高め、それに深みを与えるものでなければならぬでしょう。もちろんカリスマは神の自由な賜

ものでありますから、人間が工夫して導き出せるものではありませんが、神に対する絶対的従順、無私の献身、徹底した隣人愛というようなものを離れて、靈の賜ものをいただくということは、あり得ないでしょう。カリスマは世俗主義とは絶対に相容れないものです。

△同志社大学教授△

教学院通報

開教七十周年を迎えるに当って

昨年末開かれた第四十九回審議会において、昭和三十五年を第一年として三カ年後即ち昭和三十七年に開教七十周年を迎えるに当り、三十五、三十六、三十七の五六七の三カ年間に大本運動を積極的に展開すべく本部は諸準備を進めているが、案の主要点に左の三つを挙げている

一、教学の確立官教の積極的展開を第

一義としたこと。

二、将来の教団の方針に関しても基本的な方向を見出していること。

三、みろくの世建設の第一歩として大本発展の基礎課題として考えていること。

教学院としては右の方針に従って、体力の強化と準備を進めつつある。

編集後記

▽「大本教学」を発刊することになった

主旨は、創刊の辞に述べた通りであるが、ここに読者に告げておかねばならないことが若干ある。

▽本誌はひろく、信徒にまで読まれるために発行したものではなく、指導層を対象としたものであるということである。

△従って本誌に発表されたものの中にも教学院としての見解を示すものもあり、個人的見解もしくは研究を発表される場

合もあるわけである。

△大学院としての見解を発表したものであっても、これを割り切っておしつけようとする意味ではないので、これに対して前大学院長出口伊佐男氏や総長出口栄二氏または幹部の人々からの別個の見解や批判が出ることもあるかも知れない。また地方の読者の中からもいろ／＼な意見が出されることもある。こういうことは大いに歓迎するところであって、どこまでも教学の立場から真理の追求にむかって進んでゆきたいと念願するものである。

△前院長出口伊佐男氏は、こういう意味のことを語っておられた。

『今後、大本教学において、示された「誠」ということは何か？ということ、また如何にすれば、御神徳をいただけるか？ということが研修されて頂くべきではないか』

こうなると、今後いろ／＼な問題が当然出てくるであらうと思う。

△大本はいわゆる「お神徳信心」ではないが、本当の意味における御神徳を受け神徳が発揮されるようにならなければ、信仰生活にも何ら感激と歡びはわかず、神業奉仕の実もあがらないわけである。△救世主問題は神書にも示されており、前にも「神の国」特集号でも取扱ったことがあるので、今さら問題はないと思うが、あらためて「救世の神業と救いの信仰」という題で、大学院としての見解を述べてみた。これに対して、何らかの批判なり見解があったなら、御遠慮なく述べて頂きたいと思う。木庭氏の「大本教典の範囲」も大学院としての見解である。

△土井靖都氏の「神について」は、氏の大本神観の一部を披瀝したものである。△喜多哲良氏の「大本史観について」や成瀬氏の「世界・日本・大本」、鈴木氏の

「みるくの世に就いて」はそれ／＼研究もしくは調査から生れた論文である。

△創刊号は勿々の間に編集されたために筆者を教学院内の人々に限定せざるを得なかったが、漸次号を追うてひろく他の人々の研究なり、意見を發表して、所期の目的にむかって進んでゆきたいと思う△本誌の編集事務は、すべて山本荻江氏の手を煩した。ここに執筆された方々や編集事務に当った山本氏に厚く感謝の意を表す。

(校井)

昭和二十五年一月二十五日 印刷
昭和二十五年二月 四日 發行

「大本教学」創刊号

(非売品)

編集兼 校井八洲雄
發行者

印刷者 土居重夫

發行所 大本教学院

京都府亀岡市天恩郷